

栗 空

由村陽子君追悼号

立命館大学ワンダーフォーゲル会



由 村 陽 子 君



八ヶ岳 PW 莼科高原にて



事 故 現 場



夏合宿 後立山連峰 朝日岳にて



夏合宿 遠見尾根 地蔵の頭にて

四	遺稿
三	序
二	由村君の意志について
一	事故報告
	事故報告にあたって
	一、事実経過
	二、事故原因分析
	三、事故処理反省
	四、会体制改善点
	五、総括
	六、協力者名簿
	七、事故処理会計報告
四	朝日平にて
三	由村君の追悼文
二	一、陽子ちゃんへ
一	二、陽子へ
	三、よっしんへ
	四、私たちの心の中に
	五、YOKO

母	父
樹	黒田小学校一同
岡	由村俊道
美津子	アイ子

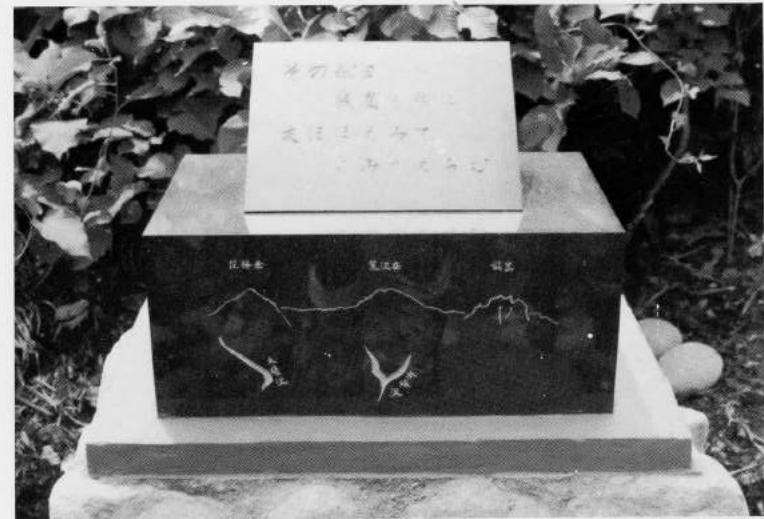
C・L	総長
波戸深	川本八郎
	細野陽子
	由村陽子

45	43	42	37	36	36	35	35	33	30	26	25	5	5	3	2	1
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	---	---	---	---

目

次



その秋日 幾度も胸に 友ほほえみて よみがえらむ



由村陽子君追悼碑

六、今、太陽の光に

七、ヨーコに

現役会員

高瀬恵子  
井上妙子

上越P・W事故をふり返つて	O	B	66	65	64	62	61	59	59	57	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	48	46	45
協力者O・B芳名	内田	川崎	片山	中村	伊藤	鈴木	野田	塚越	沼田	越一郎	一彦	美子	一郎	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
会計報告	山田	福田	石川	後藤	安原	原泰	田中	片山	野田	塚越	一郎	美子	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
追悼碑建立にあたつて	福田	和千	宗和	千秋	光嗣	繁里	正彦	智恵子	深	正彦	稔	穏	一郎	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
編集後記	戸	田	山	川	崎	安	原	泰	田	塚	越	一郎	美子	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
法	法	法	法	法	法	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	
營	三	二	三	二	二	二	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	
四十年(法)卒	五一年(産社)卒	三八年(法)卒	五二一年(文)卒	四十年(法)卒	五一年(産社)卒	三八年(法)卒	五二一年(文)卒	四十年(法)卒	五一年(産社)卒	三八年(法)卒	五二一年(文)卒	四十年(法)卒	五一年(産社)卒	三八年(法)卒	五二一年(文)卒	四十年(法)卒	五一年(産社)卒	三八年(法)卒	五二一年(文)卒	四十年(法)卒	五一年(産社)卒	三八年(法)卒	
C・L	波	戸	山	川	崎	安	原	泰	田	塚	越	一郎	美子	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

## 七月二七日（夏合宿中）

### 由村君のメモ

も空の青さを映していたのだろうか？  
不帰ノ嶮のところで旧人もまだよく読図ができない様子。

遠見小屋までテレキヤビンで行きたかった感。不帰で水平ばしごの上でこけたのはチヨンボ。しかし水平ばしごなんでもうとゆれるかと期待していたのに。

それにしても体力のないのがくやしい。気力でいくというのは正解だけど、そんなに気力ばかりで行っていると体力が続かない。

明日とあさっての下りはなんとなくこういう感じ。だんだん下っていく。

日本海に抜けるというロマンを感じる。でもひざがもつかな？ 昨日みたいにおなかがすいて足がもつれてずるずるこけるなんてことがないようだ。

ひざがケラケラ（ここで「みんな起きてめし作ろか」とP.Lさんの声がかかる）

（山行メモより）

晴天、朝日小屋にて。午前七時すぎ。  
みんな、まだ寝ている。私としてはタベはもっと早く寝て今頃起きたかった。というのはリズムがあるから。でも、きのうのゲームはなかなか楽しかった。今までのパーティーの中ではいちばんいい雰囲気。記録をとるのは、たいへんいいことだと思う。人間の記憶力なんていい加減でたいせつなことでもすぐ忘れててしまうから。  
タベの山に月がかかった風景は、また昼間とはちがいオオカミ男がオオカミになりそうなすみきった感じだった。小桜ヶ原に水バショウが咲いていた。尾瀬ヶ原に行つてみたいと思う。

歩いていて荷物の重いのはつらい。もっと軽量化を図れないのか？ ポリタンに水がはいっているか否かだけでもだいぶと違う。

鞍部でダウンをとる少し前に雪渓のとけた池が見えた。まっ青な色は山の青さを映していたのだろうか？ それと

鞍部でダウンをとる少し前に雪渓のとけた池が見えた。まっ青な色は山の青さを映していたのだろうか？ それと

— 1 —

## 由村さんの遭難を悼む

総長細野武男

昭和五二年一〇月一六日、文学部心理学一回生由村陽子さんがワンドーフォーゲル活動中に、上越荒沢岳で遭難して亡くなられたことを昨日のことのように想起して哀しみを新たにします。

人間は誰でも死をさけることはできないし、また大体が老人の方から先に死に直面しなければならないぐらいはほとんどすべての人が考えるところです。人間の死は私たちにいろいろの事を考え直し、生命の尊しさをしみじみ味わせるものです。しかし、若い人の死は通常でないだけに深い衝撃を私たち生き残っているものに与えます。人間の活力が溢れ出して活動している若者の死ほど私たちにショックを与えるものはありません。由村さんの死は生命力のあふれる姿を示している若者の死として、また心身の力をふりしぼってのワンドーフォーゲル活動の死として、私たちに大きな傷跡を残しています。

両親を始めとする肉親の方々の受けられた悲しみは思つてみても大変なものでしょう。長い病氣の果てに半ば覚悟して迎えた子供の死に会った私は、絶対と云つてい

いほど考へても見なかつた娘の死がどれほど深刻なものであり、悲しみに堪えないものであるかをある程度理解できるつもりです。改めて家族の方々におくやみの言葉を申し上げます。

学生が若者として多方面にわたつて活動するのは当然ですし、私たちは学生の自主的な活動を極め奨励しています。ワンドーフォーゲルもそうした自主的な活動の仲間です。また青年である学生が冒險に厭むことも青年として当然のことです。何事にも挑戦するというのがある意味では青年の特権です。

しかし、自主的活動は同時に自主的規律が伴なうし、挑戦には用意周到な配慮が必要でしょ。由村さんの不幸な遭難はほんとうに悲しいことだが、ワンドーフォーゲルの諸君が由村さんの事故という最大の犠牲を生かして、活動されること、これこそ由村さんをほんとうに追悼する所以だと私は思います。

短命だった由村さんの人間像がいろいろの人びとによつて語られていると思うが、その一部がワンドーフォーゲル追悼号として編まれ、吉村さんの靈に捧げられるようになされた、みなさんのお仕事に敬意を表すると同時に、再度由村さんの御冥福を心から祈つてやみません。

## 由村君の意志をついで

学生課長 川本八郎

父母を、友達を、山を、生活をこよなく愛していた由村君、君は帰らぬ人となられました。残った私達がいかように努力しようとも君は私達の前に元気な姿を見せません。しかし、私達は何よりも尊い生命にかけて努力しなければなりません。努力の内容は、君が教えてくれました全てのことをことごとく汲みつく姿勢のなかから一つ一つ明らかになるのだと思つております。忘れない事故、忘れ難き事故、決して忘れてはならない事故、十月十六日以来、ワンドーフォーゲル会の諸君は厳しい批判に対し自己批判を加えつづけ、一步歩努力してきました。ここに君の仲間の努力の一部分ですが君に報告できることになりました。由村君、読んで上げて下さい。

由村君、私は元気な君と出合うことが出来ずに終りました。しかし、君が教えてくれたことが私の中にも生きています。

一、大学のクラブ活動は遊びの集団でも趣味の会でもあります。ある対象を深く究めつゝそれを媒介にして人間の形成を目的とすることにあります。山を登ることが目的ではなく山を登ることを通じて人間をより豊かにすることにあります。重いザックを背負い、汗を流し、倒れるのでは、と思いつつ、一步、今一步登る苦しみは、山との斗いであり自己との斗いでしょう。頂上に至ると、全行程を完了したとき、斗いと苦しみは、自信に、喜びに、自然、山々のすばらしさに転化します。厳しい自然に対する人間の強さ、人間の誇りを実感するでしょう。この経験が、人生の教訓として抽象化され普遍化され各人の実生活の場で具体的に創造されるのだと思います。高い山ほど広大な裾野を眼下に置くごとく、苦労と努力の程度がその人間の中味を形成するでしょう。

一、「聖なる山々、神々の山、そして愛すべき自然」—ここに東洋的、日本的ともいえる山岳觀の半面が潜在しているように思われことがあります。「美しい自然に包まれ、聖なる山々に抱かれて……」ここからは人間の自然に対する、山に対する能動的行為の思想、人間尊重の思想が前進的に生れるのではなく、むしろ後退するよう思われます。厳しくかつ苦しい山岳活動は人間の自

然に対する人間たる存在の挑戦であり、人間の自然への征服の歴史的活動であると思います。だからこそ、正確な調査、周到な準備、冷静な判断力、強烈な肉体の養成が求められるのです。そうでなければワングル活動は若者の冒険活動として酷評されるでしょう。知性と理性を排除したクラブ活動は学生のクラブ活動たりえないでしょう。

「青年は自主性を求め、主体性を主張し、自由を望んでいます。しかし自主性、主体性そして自由も、自己という人間が社会的・歴史的存在であるという認識を欠いたとき、又集団が歴史的・社会的関係のなかに存在していることを忘れたとき、個人も集団も聞くもおろかしい一人よがりの姿に転落を余儀なくされるにちがいありません。主観的にはどうあらうとも人間の諸活動は全て本質的に社会的なものであります。人間のみが自分を、自分の属する集団を客觀化してみることが出来る存在なのだと思います。青年の有する自主性自由への熱望、これを人間の本質的存在である歴史性と社会性のなかで正しく生かす努力こそワンドーフォーゲル会の姿でなければなりません。

「私達をとりまく状況は急激に変化し、山を対象とす

る諸行動も大きい変化を示しております。立山も乗鞍もバスで頂上近くまで行くことが出来ます。夏の立山、室堂近辺では、ハイヒールの女性も多く見ることが出来る状況です。又、一方では登山のスピード化が競われる状況で、一方では登山のスピード化が競われる状況も出て来ています。山岳活動の大衆化が観光化とスピード化に曲げられております。

ワンドーフォーゲル活動は最も人間を人間らしく尊重する人間的活動であります。又そうでなければなりません。とりまく状況に流されることなく批判的に正しく把握し、人間のための活動の在り方を基軸に常に前進しなければなりません。

由村君、君が残してくれた汲めどもつきない教訓を生むごとく大切にし、君が愛したワンドーフォーゲル会は一步一歩着実に踏みだそうとしております。

どうかやすらかに眠つて下さい。

## 合掌

## 事故報告にあたつて

チーフリーダー　波戸　深

昭和52年10月16日12時10分、我々は上越荒沢岳前嵩において、由村陽子君（文学部心理学専攻二回生）を岩場からの転落事故の為に亡くしました。

御遺族の方々には、その御胸中御察しし、御詫びのことばもございません。しかし起こしてしまったものは致し方なく我々は二度と事故を繰り返さない為に努力するほかないと考え、これを大前提として事故原因の徹底究明並びに会体制の改善を行なってまいりました。その結果が漸くまとまりましたので慎しんで御報告致します。

今回の事故は後述しますように多種多様の要因が重複して起つたと思われます。しかしその根底にあったものは、我々が事故を実体として受けとめず、自らが起こそ危険性をはらんでいるということを解説して来た点に大きな誤りがあつたと思われます。また、今回の事故を契機に、我々が忘れてはならないことは、我々が行なつている自然活動が全く人間社会から隔離されて成り立つ

てゐるのではないということです。我々は、多くの人々の協力を得て活動を行なっています。この点我々は軽視してはいたようと思われます。

我々は、この2つの点を再認識し、出来る限りの安全策を講じ、また新たな気持で活動にとりくんで行きたいし、それが亡くなつた由村陽子君の死に報いることでもあると思います。

### 一、事実経過

#### 1. 計画段階

##### ① 上越P・W（＝パートワンドーリング）の主旨

我会の活動は、P・Wを中心に行なわれてゐる。これは、個人の自然観追求の為、リーダー層が企画した活動に、その主旨に賛同した会員が、自分の意志で参加するものである。上越P・Wもその一つとして企画された。P・L（パートナーリーダー）の主旨は、次の様なものであつた。「上越の山々は、いまだ訪れる人も少なく、処女の如き新鮮さを残している。夏はまさに緑一色で、深いブッシュのため、決して楽な山行ではないが、秋ともなると、ブッシュは枯れ、山肌も紅葉で着飾り、私達の目を楽しませてくれるだろう。（中略）巻機山を目指し、日

本的な美しさの上越の山々を楽しみたい。」

②企画・審査

6月頃から企画は練られ、夏休み前にコースは決定されていた。3年前に同じコースを経験した4回生からアドバイスをうけた上で、9月12日のリーダー会(=し会)審査、13日の例会審査に臨む。し会審査では、P・しから岩場やブッシュの状態について説明を受け、冷雨やエスキープの使い方、水、秋山装備、メンバー編成について注意、確認された。例会審査においても、水や鍋場、ブッシュなどについて質問があつたが、3年前のP・Wに新人女子が参加しており、女子の参加については問題とならなかつた。9月中に3年前の記録に目を通し、現地への問い合わせも済ませられた。

しかし、P・Lの川崎自身が、兎岳から巻機まで2度行ってること、又、リーダー会員にこのコースの熟知者がいなかつた為、川崎自身の説明を聞くというのが、大勢であつた。

我が会の活動の企画は、個人企画であり、それが、L会審査、例会審査において、助言、勧告され会活動として認められる。

③行動予定〔行動予定時間〕

10/14 16:長岡 小出IIバスII銀山平(村杉)◇(サイト)

16:◆—前富一荒沢岳—灰吹岳—灰の又山手前鞍部◇

【6:00】 17:◆—灰の又山—巻倉山—兎岳—丹後山◇【3:55】

18:◆—越後沢山—本谷山—下津川山手前の鞍部◇

【3:30】 19:◆—下津川山—小沢岳—永松山—巻機山◇【6:10】

20:◆—清水【2:55】

21:22:23:予備日

④トレーニング・ミーティング

10月1日にメンバーは最終決定され、13日までの間に、トレーニングは8日間、ミーティングは11日間行なわれた。トレーニングは、腕立て、腹筋、背筋運動やランニング、歩荷が、サーキット形式で行なわれ、ブッシュ、岩場に備えて上半身の強化に力が入れられた。ミーティングでは、通常の装備振り分けや食料計画の他、コースの徹底が努力された。

イ) トレーニング内容 (10/23 5 6 8 9 10 11 12)  
(準備運動) ↓ (腕立て、腹筋運動) ↓ (ランニング)

↓ (歩荷) ↓ (腕立て、腹筋運動) ↓ (ランニング) ↓

○山行経験

5/1 5/5 新人合宿(比良、北山)

5/7 5/15 八ヶ岳P・W(北八ヶ岳→南八ヶ岳)

7/13 7/14 夏合宿予備合宿(比良) : 「脚気及び疲労の為途中下山」

7/21 7/8 夏合宿(北アルプス:遠見尾根、不帰ノ峠、白馬三山、親不知海岸)

○身長・体重・視力(入学時の資料より)  
身長:一五六・一cm

体重:五〇・二kg

視力:右〇・三(矯正:一・〇)

(イ) 団体装備

⑥装備

川崎:ホエブス、衛生バッグ、つめ切り、非常食、病人

食、ベンチ、針金、笛

中山:ホエブス、ガーゼ、ティッシュ(1)、ジョウゴ、メタ、

パッキン、バーツ、ベンチ、ローソク(1)、笛、ローソク

立、かさ

安原:ホワイトガソリン(2ℓ)、カメラ、フィルム、携

帯用スコップ

- ⑤その他(由村君について)  
10月11日、由村君がひざ痛、腰痛を訴えた為、P・Lは医者へ行くよう指示した。由村君から「別に異常はない」との報告を受けたので、12日のトレーニングで様子を見た上で、山行に参加させた。(医者は筋肉痛の為、山行参加は無理である、という診断を下していた)。由村君が、タッシュが小さいという理由により、男子用ザックを使用して、新しい登山靴での山行に参加することについて、P・Lからの明確な指示、及び注意は別になかつた。装備振り分け後、新人が一人抜けたが、それによつて、団装が由村君に加わることはなかつた。

	朝	昼	夜
10/17		ソーセージ6, アメ, ジャコ各1袋)	ピーマン, 人参各1)
10/18	焼そば8	行動食(リツ小6, 一口まんじゅう2袋, ピーナッツ1袋, チョコ1袋, チーズ6)	五目飯(シーチキン1人参1, ゴボウ1, 干しいたけ½袋, インスタントすいもの6)
10/19	焼そば8	行動食B(ビスケット4, ソーセージ6, チーズ6, アメ1袋, 甘納豆1袋)	サツマ汁(玉ねぎ2, 人参1, ベーコン300g, ミソ500g, サツマイモ2, ゴボウ1)
10/20	マルタイラーメン4	行動食C(クッキー4ソーセージ6, ジャコ1袋, ピーナッツ1袋)	
10/21	焼そば7	行動食A(エンゼルパイを除く)	とりかまめし3
10/22	焼そば7	行動食B	山菜かまめし3
10/23	焼そば7	行動食C	とりかまめし3
調味料	デザート	非常食	
しょう油500cc	ようかん2	レモン2	
砂糖 1kg	紅茶	ようかん1	
だしの素	緑茶	病人食	
塩, コショウ		ハチミツ1	
ラード		カタクリ粉1	
みそ500g			

後藤: コップフェル、ホワイトガソリン(2ℓ)、ラジオ、天気図、電池スペア、ローソク1、ポリタンク  
伊藤: テント一式(長七)、サブザック、裁縫用具  
由村君: ナベ、食当小物一式(ホウチヨウ(2)、タワシ(2)、平しゃく、玉しゃく、(各1))、サブザック、テツシユ(2)、クレンザー、ビニール袋、食ボリ(1ℓ)  
(口)個人装備  
学割、新聞紙5日分、おふろマット、常備薬、ロングスペツツ、キルティング、日出帽、毛手袋、軍手、ボリタンク(2ℓ, 3ℓ)、セーター(2)、ショートソックス・スペア、ニッカホーススペア、タオル(2)、食器(2)、カッパ、サジ、シュラフ(寝袋)、ローソク、携帯燃料、細引き、懐中電燈、電池、電球スペア、マッチ(5)、ポンチョ、輪ゴム、ビニール袋、ティッシュ、靴ひもスペア、三角巾(2)、筆記具、コンパス、学生証、保険証、献血手帳、地図、非常食(3食分)、鈴、Wヤッケ、歌集、キスリング、安全ピン

#### ⑦食料計画(6人分)

	朝	昼	夜
10/15	アンパン3×6 飲み物各自	フランスパン½×6 サラダ(ハム1, キュウウリ3, キャベツ½, リンゴ2, マヨネーズ300g, ミカン缶詰1) 紅茶	八宝菜(素12人分, ベーコン300g, 白菜½人参2, ピーマン1, 玉ねぎ2, 干シイタケ½袋)
10/16	稚煮(もち4×6, かつおぶし½袋, ちくわ2, 白菜½, だし1)	行動食(ビスケット4みかん, ソーセージ, チーズ各6, チョコ1袋)	カレー(素12分, ベーコン300g, 人参1, 玉ねぎ2, ジャガイモ2袋)
10/17	ラーメン8	行動食A(レモンパック4, エンゼルパイ8)	チャーハン(素12人分ソーセージ2, 玉ねぎ

## 2. 行動記録

1) 京都出発から事故発生前日まで

<経過>

10月14日

22:57

京都出発

急行“きたぐに”

10月15日

10:10

銀山平到着

12:00

昼食

16:00

天気図をとる

19:00 まえ

天気予報を聞く

20:00

就寝

2) 事故発生当日

① 銀山平出発から事故発生まで

<行動経過>

4:45 起床

(満天の星)

6:30 出発

<パーティの様子>

出発時、PLは、天候に関し3~4時間は雨が降らないだろうと判断。

歩く順番は中山(サブリーダー, S.L.)由村君,

<行動内容>

由村君のザックの重さは水5ℓ含まないで22kgで特に重いとか軽いというものではなかった。

又、パーティーは米原付近で眠る体制に入り、由村君は、列車の中で充分とは言えないまでも、眠れたと思われる。

テント設営、後、休憩

昼食後、差し入れを食べ、その後雑談

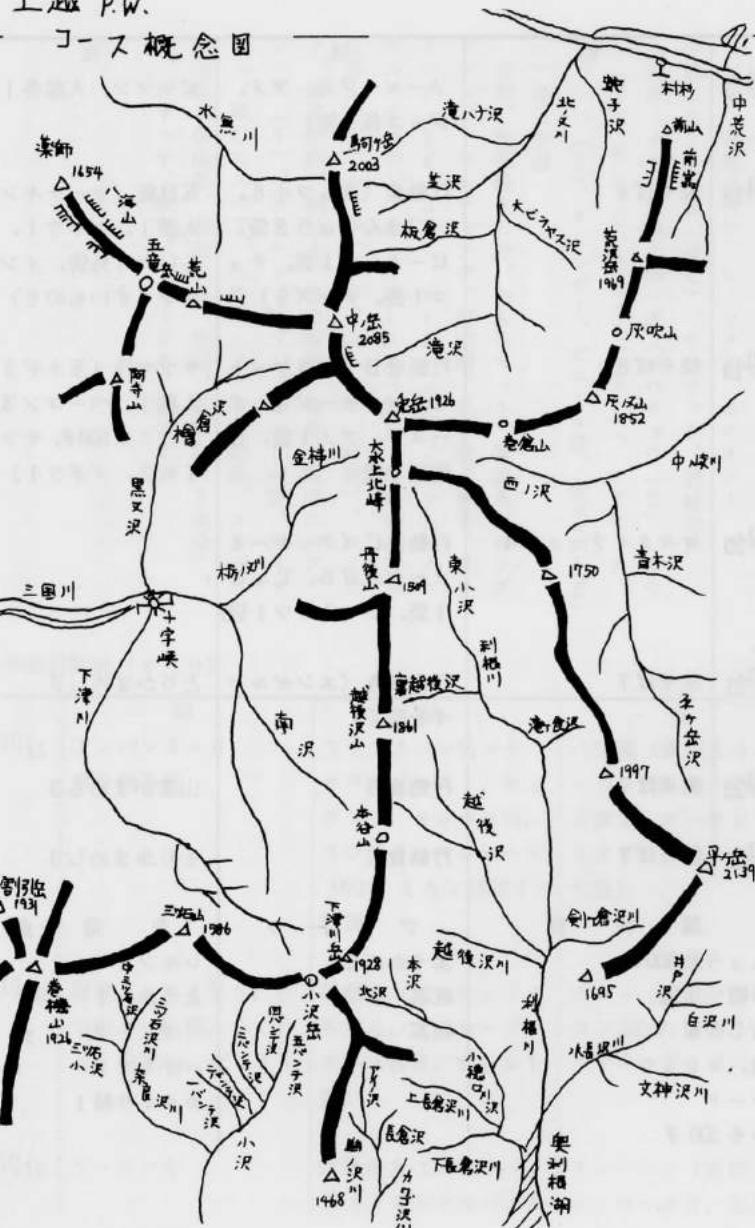
天気図よりの判断(天気図参照)

「寒冷前線が近づいており、明日の天気はくずれるだろうが、大幅にはくずれず、午後には天気が回復する」ということを予測。

群馬北部の明日の天気「晴れ、山沿いでわか雨」

上越 P.W.

コース概念図



<行動経過>

9:00 ダウン  
(コース 概略)

前山から最初の鎖場までは、小さな登り下りが続き（小ピークが3～4ある）途中左がドーンと落ちているところが2～3ヶ所ある。

(天気推移)

雨は降り続いたが、時々止んだと思える程弱まるこどもあった。肌寒かった。

<行動経過>

9:15 出発  
・ 9:30 最初の鎖場に入る

<パーティの様子>  
た2人連れの登山者が戻ってくるのに出会い、S.L.は荒沢岳の方がまっ暗で岩場の前で戻ってきたということを聞く。

<由村君の様子>

鎖場に入って、伊藤と安原の登る順番を入れ変わる。  
中山、由村君、安原、伊藤、後藤、川崎（P.L.）の順。  
中山の判断で、このピッチ2度程由村君のザックをおろさせ、中山及び安原が上げる。

10:03 ダウン

行動食を食べる。

特に異常なし。岩場に入ってから以後コースを通じて由村君に中山、安原からゆっくり登るように指示。しかし、大股で登ろうとするので、安原から小股で行くように繰り返し指示を行なった。

ダウンの直前、腰が痛いと言っていたが、ダウンの間、パーティー内の冗談にも答えていた。

<天気推移>

岩場に入った為か、全員雨のことは覚えていないが、10:03にダウンした時、今まで一番強いと感じられた。

<行動経過>

10:20 出発  
すぐ一枚岩着

<パーティの様子>

（一枚岩の通過状況）  
中山、安原の順に登り由

<行動経過>

7:10 ダウン

(コース 概略)

前山までの約300mの低灌木帯の中の急登の道はしっかりしている。

(このピッチ（行程）の天気推移)

出発時、西の山々の上に白く厚い雲が見えていたが、他は全部青空、その後、30分程で厚い雲が空全体を覆ってきた。

<行動経過>

7:20 出発

<パーティの様子>

P.L.は「予定よりも遅れるのではないか、サイト地での水の補給をどうしようか（水場が遠い）」と考える。

7:40 前山通過

<由村君の様子>

S.L.（サブリーダー）から遅れぎみ。

<由村君の様子>

遅れぎみ、少しバテていた感はあったが、足どりもしっかりしていたし、息づかいも気にとめる程度なかった。P.L.が腰痛について質問したが「大丈夫」と答える。

8:00 ダウン

カッパ着用

<このピッチの天気推移>

前山ピークに達した時、空はすっかり雲に覆われており、中ノ岳、駒ヶ岳の中腹にはガスがかかっていた。しかしピークは、はっきりと見え、またガスの中に全体像がぼんやりと遠望できた。前山通過直後、ポツリ、ポツリ程度の雨が降り出した。

<行動経過>

8:10 出発

<パーティの様子>

最初、先に行つもらっ

<行動経過>

11:20 出発

12:10 事故発生

(コース 概略)

分岐～荒沢岳への稜線

右に、前嵐の絶壁を見て鎖のついた下りが距離にして30メートル続く。下りきると、3～4メートル程、水平な所があり、次に急斜面の30メートル程の岩場で鎖がある。登りきると、道は左に続き小さな尾根のような所（鎖あり）にとりつく。岩のデコボコした道を20メートル程行き、岩を登りきると、眼前に岩の固まりが現われ、それを巻いて道は左に折れる。（事故現場）道は岩の固まりの上に続き、3～4分程鎖場を登ると稜線に出る。

(天気推移)

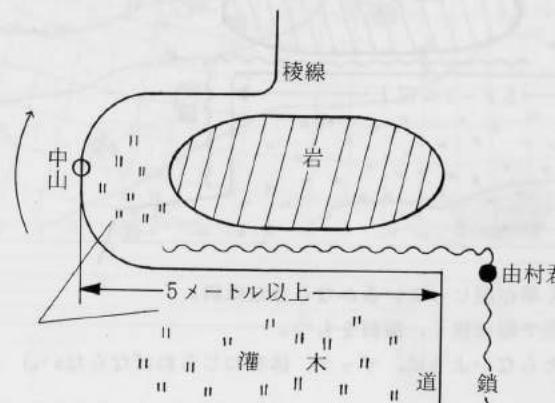
雨・風ともになく、ガスで展望は全くきかなかったが、視界は少なくとも20メートルはあった。ボンヤリとならば50メートル程先のものも見えた。

②事故発生時の状況

ボコッボコッとした岩を登りきると岩のかたまりが現われる。道は、それを巻くように5メートルくらい左におれる。

中山は、由村君が直登を登りきった地点で彼女を確認し、道ははっきりしていたのでそのまま進む。（状況図A）

(A)



<パーティーの様子>

直登の途中で、荒沢岳からの下山者（男1人）に出会う。

<由村君の様子>

由村君は、息をきらせていた。登り方は依然大股なので注意を受ける。

<行動経過>

村君には、ザックをおろさせ一枚岩の横の登りやすい所を行かせた。

その後、後藤、伊藤、中山（由村君のザックを持つ）川崎の順に登る。中山、安原、川崎は随時注意指示を与える。また雨で岩が滑るので慎重に行った為時間がかった。

(30分程)

10:55 ダウン

前嵐最高点

巻道分岐点

由村君と伊藤が初めて由村君の3ℓボリタンから水を飲む。

川崎と後藤で稜線通しのルートを見に行つたが、大キスでは登るようなルートではないので、中山、安原は巻き道を確認に行き、巻き道に行くことにした。

<パーティーの様子>

手帳からアルパインガイドの抜き書きを読む。

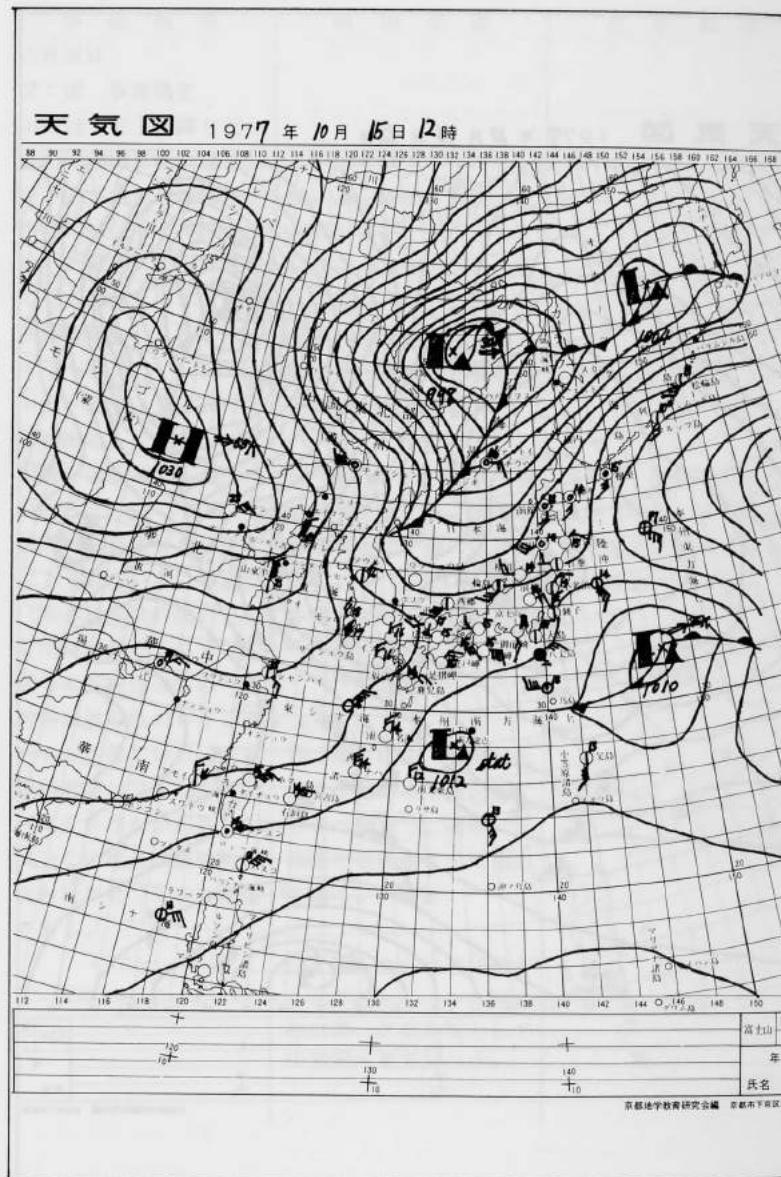
(コース 概略)

最初の鎖場～前嵐最高点巻き道分岐点

しばらく鎖が続くと、すぐに一枚岩から続く一本の長い鎖の末端に取り付く。はじめ土まじりの岩場で登りきると、5メートル位の一枚岩となる。次に2メートル強の鉄ばしごが現われ、そこを登りきると稜線に出る。分岐までは、岩がボコボコした稜線である。

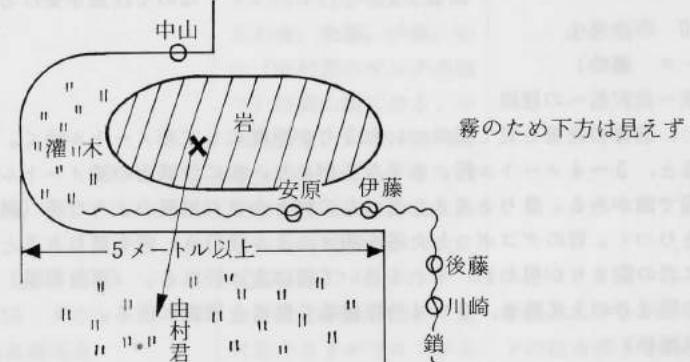
(天気推移)

後藤、伊藤、由村君の3人が鉄ばしごを登り、ザックをおろして待っていた時には、すでに雨は止んでいた。（結局、雨は約3時間降っていたことになる。）それ以後、雨は降らなかった。ガスは前嵐の山肌がモヤーッとした感じで、分かる程度で風は無かった。



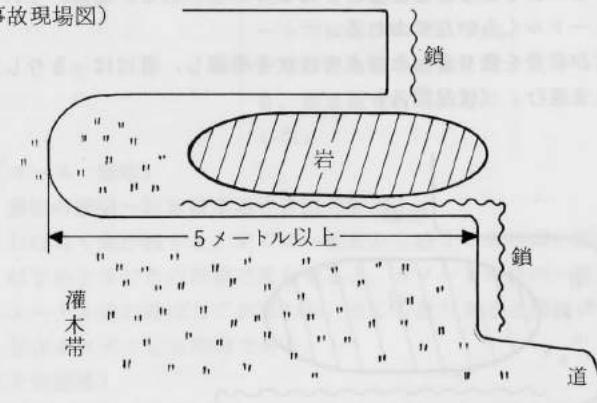
(B)

その後、安原が直登を登りきった時、由村君はルートを誤認し、岩の間を登ろうとして、岩にとりついた状態で、行きづまっていた。安原は、左への道を見つけ、姿は見えない中山に声をかけて確認をとり、よりかかる感じで、



右手を岩について、由村君に戻るよう指示し、左足のスタンスを指示した。由村君は、それを探している時、左下方へ顔を上にして、灌木帯の中へ落下その後、後転しながら、直線距離300～350メートル程落下した。(状況図 B)

(事故現場図)



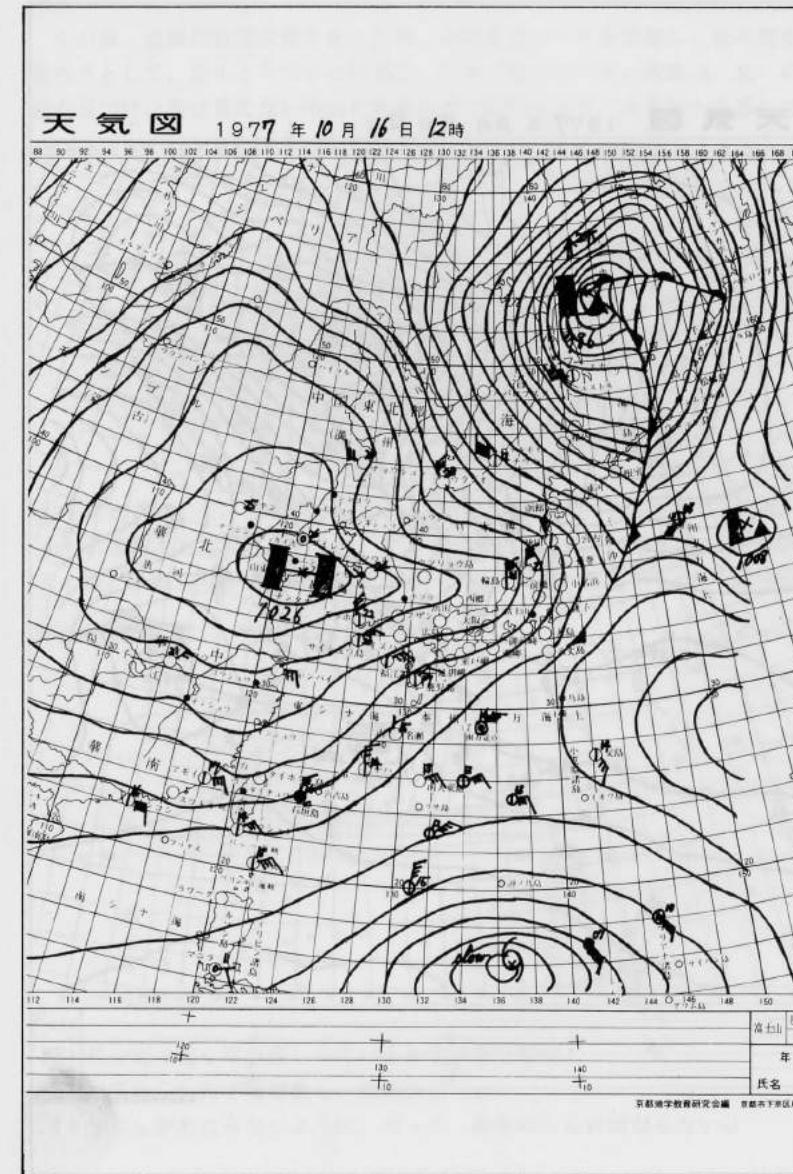
灌木帶は背は低く草が混じっているかなり急な傾斜。

道は、露出した岩で幅は狭く、傾斜をもつ。

(タッシュがあたらないように、ザック、体をねじらねばならない。)

### 3. 事故処理

事故現場	現地本部	在京本部
10月16日 12:10 事故発生 川崎はすぐ下へ降りだし 中山、安原に伝令員として下山することを指示。 伊藤には伝令の準備を指示し、後藤には下へ降りてくるように指示する。 後藤は衛生バックを持って下へ行く。 中山、安原、5分後に伝令に出る。 川崎、後藤は下る途中、由村君のタオル、血痕、小物入れを発見。もうこれ以上下れないという地点 (高さ10m位の崖の上) で川崎は崖の下にガスを通して黄緑色のもの(由村君は黄緑色のレインパーカーを着ていた。)を見たが確認はできなかった。 (声をかけたが応答なし) (→この地点は最終的に由村君が見つかった場所である。)	13:20 中山、安原(三溪荘)着。 三溪荘の人が伝之助小屋へTEL。 2人は伝之助小屋へ向う。 伝之助小屋の人が警察へ連絡。  13:30 中山、在京へ事故発生を伝える。安原は事故現場を小屋の人へ説明 荒沢ヒュッテが救助活動に都合が良いので今後連絡場所とする。	13:30 在京(山田)に現地(中山)より事故発生を伝え、旧人確保を依頼する。
	13:40 中山、安原は伝之助小屋の車で荒沢ヒュッテへ向かう。途中、三溪荘で登山者5名に協力を願う。	
	13:50 中山は連絡員として荒沢ヒュッテへ残る。他は第一次救助隊として中荒沢へ車で向かう。	



事故現場	現地本部	在京本部	事故現場	現地本部	在京本部
10月17日	<p>23:00 遺体、荒沢ヒュッテ到着（パーティー全員合流）</p> <p>23:00 林（3回生）小出署着</p> <p>0:50 小出署安置</p> <p>0:52 在京TEL</p> <p>1:30 パーティーメンバー全員と林、検死に立ち会う。</p> <p>1:45 波戸（チーフリーダー3回）小出署到着。</p> <p>3:50 御遺族の方、桑村、森、小出署着</p> <p>4:00 在京へTEL</p> <p>5:25 在京へTEL</p> <p>○現地における今後の行動を打ち合わせる。 ・パーティーの残留されたザックの回収 ・診断書等の書類手配 ・在京との連絡について等</p>	<p>事故対策金を持参し、現地へ向かう。</p> <p>0:52 林よりTEL 小出警察署に遺体が安置されたとのこと。</p> <p>4:00 現地よりTEL 小出警察署を現地連絡先とするとのこと</p> <p>5:25 現地よりTEL 尾瀬パーティーが下山すれば現地に向かわしてくれとのこと。又、在京より、旧人2名を合資金を持参させ現地に向かわせたと連絡。</p> <p>5:30 尾瀬パーティーへの連絡の確認のため、長蔵小屋へTEL。 「尾瀬パーティーへの連</p>	<p>14:05 川崎、後藤、伊藤は稜線に出てビバークの用意をする。</p> <p>15:00～16:00頃 パーティーの残っていた者第一次救助隊の声を聞く。しばらくして合流。</p>	<p>第一次救助隊 伝之助小屋主人、登山者男性4名、女性1名、安原 計7名 救助隊の向かう道は途中まで車道、その後遊歩道。 その終点 200mほど手前より前嵐へ続く最近切り開かれた険悪な尾根道である。 ○車道の終点に男性の登山者1人を連絡員として残す。 ○伝之助小屋主人は遊歩道と新道との分岐に残る ○新道を5人で進むとしばらくして村杉山屋の主人が追いつく。 15:00頃 パトカー、救急車にてレインジャー部隊到着</p> <p>15:10 第二次救助隊（レインジャー部隊を含む。トランシーバー2台を持参、現場との連絡はトランシーバーで行う）が出発する。</p> <p>15:15 在京へTEL</p>	<p>14:40 由村君の自宅へ事故発生を知らせる。</p> <p>15:15 現地（中山）より第2報、第1次救助隊、第2次救助隊が現地へ向かったとの連絡。</p> <p>15:27 由村君の自宅に中山の第2報を知らせる。</p> <p>15:29 林（3回生）が</p>

事故現場	現地本部	在京本部	事故現場	現地本部	在京本部
		<p>ロッヂへ「すぐに学生課へ連絡するように」と伝言を頼む。</p> <p>13:40 林、小出駅へ親族の方を出向かえに行く 14:20 署から棺が出る</p> <p>14:50 火葬場に向かう</p> <p>16:00 在京にTEL</p> <p>17:15 遺骨は遺族の方々とともに旅館に着く。 17:55 川本学生課々長三木氏、有賀（3回）寺島（2回）着</p> <p>20:00 在京へTEL</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・御遺族の方には18日9:05に小出を立ち、15:17 京都着の予定</li> <li>・林、波戸が同行すること</li> <li>・又、桑村、森は事故処理に当る。19日帰京の</li> </ul>	<p>16:00 現地よりTEL 現地連絡先の変更。 小出署→「すさを旅館」 16:45 学生課岩佐氏より、御池ロッヂへ尾瀬パーティーの者がサイトしているかどうか確認のTELを入れる。「御池ロッヂでは見かけていない模様」</p> <p>20:00 現地よりTEL 現地の今後の予定について連絡 ○在京全会員に明日（18日）の総会及び、遺骨の出向かえについて確認の連絡 ○事故パーティーの家族</p>	<p>○午前中に書類手続をすませる。</p>	<p>尾瀬パーティーの下山（10/20）後、明らかになつたことであるが、小屋の方は、立教大学と聞き違えて連絡し、又パーティーはサイト地にて大学名を明記しなかつたため、下山するまで連絡がつかなかった。</p> <p>6:30 尾瀬パーティーへの連絡の再確認のため、長蔵小屋へTEL。</p> <p>9:00 学生課に事故の状況、その後を伝える。</p> <p>9:20 事故対策在京本部を立命館大学、学生課（広小路）に一本化する。</p> <p>9:50 現地（小出署）へ学生課を本部としたことを連絡する。</p> <p>13:00 衣笠学而館 208号室にて臨時総会。           <ul style="list-style-type: none"> <li>・事故発生、状況、経過を全員に伝える。</li> <li>・事故に関する以外の一切の活動を停止することを確認。</li> </ul> </p> <p>13:00 学生課岩佐氏より、尾瀬パーティーの本日のサイト地である御池</p>

事故現場	現地本部	在京本部
	16:20 登山口にて全員合流 10月19日	その後、学生課における在京本部は解散。 17:00 3回生ミーティングにて今後のこと話をしあう。 10月19日 7:45 パーティメンバー他4名 北国にて京都駅着

二、事故原因分析

1. 事故の直接原因

由村君は、SLを見失い普通なら、まちがえるとは思えない正規のルートに気づかず誤認し、岩場を直登したが行きづまり、旧人の指示で降りる途中左足が指示された足場にのらずバランスをくずし転落したと推測される。この状況より以下の原因が考えられる。

○ザックの重さ、大きさが下降の際、由村君に影響を与えた。

○SLと由村君の間隔があきすぎていた。

(a) 行動について

事故現場においてSしは由村君との間隔があきすぎてしまったが、なんらかの配慮が必要であったし、旧人も下降させる際、より適切な指示をすべきだった。また、出発前夜のミーティングで岩場に対する注意を怠つたり、雨天時の岩場通過を重大視しなかったこと。前日の天気図判断を行動に何ら生かせず、岩場へもはつきり判断しないまま曖昧に入ってしまったことなど岩場に対する認識が不足していたと思われる。これは、パーティとして

事故現場	現地本部	在京本部
		予定。 他の者は、ザックを回収後、18日午後か夜行にて帰京の予定
		21:10 学生課の在京本部解散(明朝8:30より再開) 後、在京連絡先を渡辺(3回)下宿先へ移す。
10月18日		8:30 在京本部は学生課にもどる。
		9:05 「とき2号」にて御遺族の方々は帰京。波戸、林同行。
		9:15 川崎、伊藤を旅館に在京連絡員として残し、他の者は、銀山平へ(桑村、森、有賀、寺島安原、中山、後藤)
		10:15 銀山平着
		10:45 ザック回収に登山、その間、桑村、森は地元の方々に謝礼、挨拶に行く。
		12:30 広小路存心館41号室にて臨時総会。 その後、全会員京都駅へ向かう。
		15:17 御遺族の方々とともに遺骨は京都駅に到着。

重大なミスである。また、岩場に入つてからP.L., S.L.旧人、相互の連絡が不十分であり、P.L.がパーティーを十分把握できなかつたことも問題である。

(b) 把握について

由村君の体力及び性格の把握が不十分であり、由村君の精神的負担や筋肉痛への配慮も欠けた。これはパーティーとして問題であるし、会員個々の体力、性格を把握するシステムをもたなかつた会活動の不備であるといえる。岩場の通過を考えるなら、ザックの重さを考慮すべきだったが、これも会として女子の体力的位置づけが、明確でなかつたことに起因している。由村君自身にも、医師の診断をP.L.に正しく伝えなかつたり視力が弱いのにメガネをかけないなど、山に対する姿勢として甘さが見られ問題はあるが、P.L.は医師の診断を直接得る必要があつたし、女子ザックの変更や、メガネをかけることへの認識不足など、会全体に雰囲気的甘さがあつたことは、より問題である。由村君が男子用ザックで参加するのをP.L.が容易に認めたのもこの雰囲気的甘さによるところが大きいと思われる。

(c) 審査について

リーダー会審査、例会審査とも事前に企画者及びコー

スを把握するシステムがなかつたため、リーダー会員、会員とも下調べなしに審査に望むことが多く実質的審査になつていなかつた。今回の場合、リーダー会審査では、

岩場について留意しなかつたし、川崎（P.L.）自身の経験に安心感を持ち、安易な審査に終わつてしまつた。例会審査においては、審査の場に馴合的雰囲気があり、企画者（P.L.）の説明も不十分でこの山行の厳しさが確に伝わらなかつた。

(d) トレーニングについて

トレーニングの内容日数には、今までの我が会の方法から判断すると特別な問題はなかつた。しかし由村君の体には無理があつた。それとともに我が会の従来の方法（自主トレ・短期集中トレ）が果たして体力の維持向上、会員相互の体力把握にどれだけ効果があるかは疑問であり、問題である。

三、事故処理反省

1. 現地の反省

現地での行動内容

○ 残務処理（診断書等、書類手配、遺体の火葬の手続）

助収容活動が遅れ、それに参加しなければならない場合を考えると今まで考えてきた我会の事故処理体制では甘い点があり、現地に向かう旧人、その指揮の点など系統的、具体的な事故処理体制が必要である。

在京の連絡先が途中変更されたとか、御遺族、事故パーティーの京都での受け入れなど在京の状態が完全に把握できなかつたし、今後の行動のうち合わせ、確認が在京間と不十分であつた。

現地本部では遺族との応対とか難務におわれるためその日の行動は予定を確實に立て、仕事を明確に分担し行動することが大切であると実感されだし、またこの点が反省された。

由村君のザックは遺体付近には見当たらず谷の方に落ちたと推測される。その付近は捜索するにもザイルをする所で、我々の実力では捜索、回収することは無理であった。我々としてもザックを遺品として回収したかったのであるが、断念せざるをえず、このことは大変残念である。

尚、その後地元の方がザックを発見され、遺品を回収致

今回、救助、収容活動が全て地元山岳関係機関（消防団、消防署、警察署）山小舎、登山者の人々の御協力で迅速に行なわれ、我々が地元に着いた時は、遺体が警察署に安置され、事故処理の残務のみが残されている状況であつた。そのため現地ではそれほど感つこともなく、現地本部もわりと早く解散することができた。しかし救

しました。

## 2 在京の反省

事故発生により在京の会員はいっさいの活動を停止して事故の処理にあたった。その経過は、事実経過の通りであるが、ここではその反省を述べる。分担パートの反省、当初の在京にあたつた者の反省、在京本部の反省、総括としたい。

### ○会計パート

今回は金銭の出入は会計ブロック長によって行なわれた。実際会計パートとしての仕事は行なわれなかつたといつてよいが、会計パートの反省として金銭の出入は会計ブロックの数人により行なわれるべきだという反省がでた。また会員がスポーツ傷害保険への正しい認識がなかつたこと、また非常時の金銭に関して普段注意を払っていないかったことも問題であつたと考えられる。

### ○涉外パート

このパートも仕事としては事故パーティーの家族に事故を伝える連絡をしただけになつた。この電話連絡は必要であるが、今回の場合は、よけいな心配をさせて連絡内容を簡単にしたところ、混乱をまねいたので慎重をする必要があつた。

つた。

パート分けも日常のブロックを中心とした決め方をするべきであったと思われる。しかしパートごとに二回生を集めて待機させたことは連絡をスムーズに行う上で評価された。また今回、連絡場所が学生課、山田宅、早川宅と三つに分かれ、混乱をきたし、現地と在京との連絡不足という結果をまねいた。個人の下宿の限界と一本化しない場合の混乱等を考えると学生課との関係も今後の課題であろう。

また、今回の事故では、三、四回生間の打ち合わせが少なかつた。三、四回生ミーティング、四回生ミーティングをもつと持ち、連絡を密にすべきであつた。

もうひとつ、今回のミスとして尾瀬パートナーへの連絡ミスが上げられる。これは小屋の人の聞き違えも重なり、下山まで連絡がとれなかつた。このことについて在京は、はつきり確認するべきであつたし、尾瀬パートナーはサイト地で記名しなければならない場所では必ず団体名を書き、小屋に電話があるときは、在京に電話するべきだという反省を得た。

我が会は過去の無事故に甘え、事故に関しての認識があまりにも希薄であった。在京における混乱はすべてこ

## ○記録パート

記録パートは電話連絡内容および事実の記録のためのパートであった。しかし、これらの仕事は三回生（一二人）で十分にできる仕事であつた。また連絡を曖昧に走り書きしてしまい、誰がどこで記録したか不明なものもあり、事実の整理上問題があつた。

### ○在京

従来我会ではPWあたり、在京一名が當時在宅し、電話連絡にあたることになつていていた。だが我会では過去無事故の経験から在京をあまり安易に考えていたため、今回の事故で在京は二人以上必要であること、場所も安易に選べないこと、補助的場所の必要性が上げられた。

### ○在京本部および総括

在京本部は主として三回生が四回生の協力を得て行つたものである。事故の翌日から主となる指示は在京本部からでていた。しかし、これらはその場その場の指示でありすぎた。つまり我々には、事故時における連絡体系はあつたが肝心のその後の対処のことは、全く決められていなかつたのである。確かに、事故処理はケースごとに大きく変わるであろう。しかし、多数の会員をもつ我会では在京の細かい動き方をもつと決めておくべきである。

### ○事故処理総括

現地、在京の反省を一読するとわかるように、今回の事故処理は、目先の事に追われて何ら筋道のたつた処理を行えなかつた。そのため現地と在京の連絡が不十分となり、お互に把握ができなかつたという問題が目立つた。これは我々がこれまでどつていた事故処理連絡体系（他）に関する何ら触れていなかつたことが大きな原因であろう。つまり会員、特にリーダー層各人が過去の無事故に安心しきつて万一大の事故に対する備えのなかつたことが根本的な問題として提起されると思う。今後、我々

は京都にいる時でも我会の活動が常に危険をはらんでいることを決して忘れてはいけないであろう。また、今後活動を行うにあたって、P・W時、合宿における事故処理体制が現実にたえうるかは、日常の訓練等で十分確認しておく必要がある。

もう一点、山岳活動を行うサークルとして万一事故が起きた場合、どこまで自力で救助活動を行えるかという問題も今後の課題として残されている。しかし、我々が現在行っている縦走主体という活動レベル、今後の活動も考へると、我々が決して自力で様々な事故に対処できるだけの技術、力量を持ちうるとは考へがたい点がある。しかし、我々としても常に体力、知識、技術を得る姿勢は絶対に必要であり、そのことは二度と事故を起さないということとも密接につながるであろう。しかし事故にあたっての処置はあくまで二義的なことであり、事故対策の根本は活動の安全強化であることは言うまでもない。

#### 四、会体制改善点

事故以来これまで我々は会活動を停止し、二度とこのような事故を繰り返さないため、事故原因の究明に努力

し、また以前から指摘され、事故の原因にもつながった会体制、会組織の見直しを行なってきた。そこから明らかになつたことは、会の指針となり尊重されなければならぬ自主性という理念への甘えであった。それは、活動を個人に任せるという形で現われ、自然活動を行なう上の問題点をおざりにしてきたと思われる。我々は、この点を深く反省し、また我会の活動の根幹をなす、P・W主義と自主性尊重を真に生かすためにも以下のことを改めることにした。

##### (養成)

我会はP・W中心主義をとつておらず、養成というものが個人の自覚に任せられ、会レベルでの養成というものが明確に打ち出されていなかつた。このため会員間において山行に関する技術、知識についての差を生み出した。このことを反省し、会レベルでの養成を考え、合宿については従来より養成面を強調すること、またその際、年間を通して合宿に一貫性を持たせ養成面では会企画で行なうことを見定した。また、P・Wについては、会からの制約は特別に設けず、養成についてもPLの自覚、経験に任せせるが年間の活動については、養成を考え、リーダー層で話し合う必要があることを決定した。

れることが少なく、本人の自覚に頼り切つていたという点が反省され、旧人及びリーダーには、経験に伴なう自覚が必要であるということが確認された。我々が自然を対象に活動している以上、一定の実力は必要であり、養成と関連して、旧人並びにリーダーの資格を設け、それを基準として会員を養成して行こうという結論に達した。ただ資格を得ることにより、旧人、リーダーとして充分であるのではなく、あくまで会員のより一層の努力が必要である。

##### ☆ 決定事項

○原則として合宿三回とP・Wに参加した者を旧人とする。

○途中入会者及び何らかの理由で合宿に参加できなかつた者は、原則に見合つた活動をした者を旧人とす

る。

○PLは旧人として活動した者であること。  
○SLは旧人であること。

P・Wのメンバー拒否権について集中し討論された。どの会審査が少数で行なわれるなどを考慮し、リーダー会審査に対する異議が認められれば、再度リーダー会審査を行なうことを決定した。

##### (リーダー及び旧人資格)

我々は、旧人相互の馴れ合い、旧人及びリーダーとしての自覚、認識の欠如を反省すると共に、旧人及びリーダーシップとは何かということを再認識しようと話し合つた。

今まで会サイドでリーダーシップということが話さ

されはじめて安全かつ充実した活動がなされる。このことにより、これまで曖昧にされてきたメンバー拒否権をPLに明確に与えた。

#### (トレーニング)

我会のトレーニングは今まで自主トレとパーティーによる短期集中トレーニング形態で行なわれてきた。これは

自主性尊重ということから、平常のトレーニングを会員の自覚に任せ、会員が参加するPWに合わせたトレーニングをパーティ一編成時から短期間で行なうというものであった。しかし、会員間には、自然活動を行なう上の厳しさが浸透していなかつたため、自主トレは実際には行なわれず、そのことへの相互批判もなされなかつた。そのためパーティによる集中トレーニングはその目的を達することができず、かえつてトレーニング内容にメンバーの体がついていかないために、PW前に故障したり、疲労を残してPWに参加するという原因にもなつていた。

また短期間の集中トレーニングではPLがメンバーの体力を把握する上で無理があつたと思われる。

以上のことを反省し、会員の体力維持、向上及び会員の体力把握を確実にするため、またパーティートレーニン

われ、その中で男女一緒にやっていくか、独立するかの議論がなされたが、我会がPW主義をとっていること、女子が少数であること、現状から考えて一緒に活動していくことに決定した。

以下、今後に関しての会の結論である。

#### ○男女一緒に活動すること。

○独自に自分たちの力量に応じたPWを企画していく意識を持つ。

○ザックの重さは、山活動に関しては25kg以内とする。

○トレーニングは女子だけでトレーナーをたてて行なう。

今後の女子及び男子会員に必要なことは、体力、生理等に関する客観的科学的把握である。また依存したり、

されたりする関係ではなく、体力の客観的把握の上に立った自立の精神であり、自然を冷静に見た着実な活動である。

#### (規約)

会を形成し、責任ある会として自然活動を行なっていく以上、活動において事故などの問題があつた場合、その責任は会に帰するということは、明らかのことである。本会規約第三条但し書きにおいて、「責任は個人に帰す

が円滑に行なわれるようにするため、平常トレーニングを会で定期的に行なうこととした。その内容も他大学などのトレーニングを参考にしながら、自然活動を行なう上で体力が充分なものとなるように研究していくこととなつた。

#### ☆女子会員

これまで我々は山に対する姿勢としては、性別にかかわらず決して依存する関係にはならず、同等にやつていかねばならぬと考え、一緒に活動を行なつてきた。しかし会の中で女子と男子の体力的違いを科学的、客観的に把えようとする姿勢がなく、PLの判断に任せられすぎ、特に旧人女子の体力的位置づけが不明確であつた。またPW主義の中で女子が実力以上のPWに参加したときPLに任せてしまい、女子相互にアドバイスすることも少なかつた。

ザックにしても今年度ザックを変更してはどうかという意見が出たとき、会として真剣に受けとめられなかつたように思われる。これらのこととは、事故に際し、直接、間接に影響を与えていたと思われる。以上述べた点を充分に反省し、今後の活動を決定していくにあたり、女子は主体的に自分たちの活動を考えねばならないと話し合ふことに決定した。

「...」とあるが、本来これは会員個々が活動に参加する際の心構えを述べたものであり、会員が責任を持って自然活動を行なうことを述べたものである。即ち、規約第二条に「本会は会員の自主的活動により自然に親しみ、自然を通じて人間味豊かな人格を涵養することを目的とする」とあるが、第三条但し書きは第二条の精神的バックボーンとして存在するものである。しかしながら、この第三条但し書きの記述は会内においても対外的にもその解釈において誤解を生みやすいものであった。よって我々は会員全員で討議した結果、第三条但し書きを削除することに決定した。

#### 五、総括

我会は会員の自主性、個人の自然観を尊重しそれらを主軸とした活動形態としてPW(パート・ワンデーリング)主義をとってきた。(PWとは個人が、その自然観にみあつた企画を行ないその企画の意に賛同した会員の自主的参加によってパーティーを構成するものである。)我会は会員及びPWにできるだけ制限を加えず自由な活動を行なおうと考えてきたのである。

しかし、事故対策面に不備がありまた理念が歪曲に解

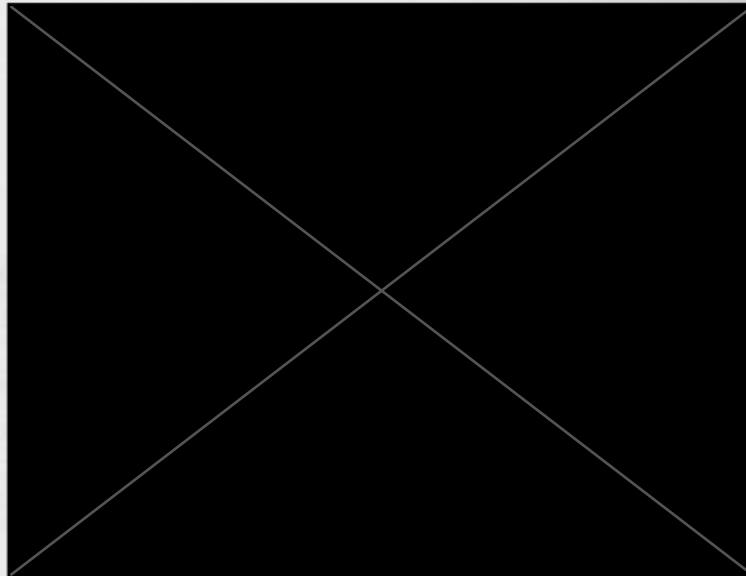
釈され会員個々に自然活動及び会に対する甘えを生みだしてしまった。このことが今回の事故を起こした我会の根本的な問題であると深く反省された。

具体的に活動の知識・技術の習得、トレーニングなどを個人の責任で行っていくという放任的な今までの姿勢、特に新人に対しても会としての養成の一定のレベル、計画性がなく単に個人の自覚のみに任せていたことは問題であった。今まで我会は会員間の厳しい相互批判の中で自然活動とともに危険、そしてリーダーシップ、メンバーシップを認識した上で活動の知識、技術の習得を個人の責任、自主性であると啓発し自覚にまかせることで解消できると考えてきた。

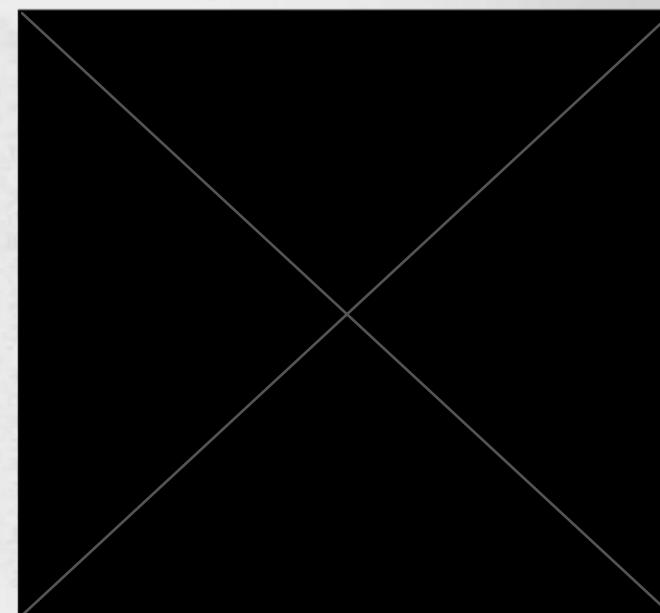
しかし、個人が自然活動を行なうものとしての責任を果たした上で真に理念が生かされるということが会員間に完全に浸透せず、自由個人が強調されたあまりに利己的な個人の肯定となり、会員相互に厳しい批判がなされ馴れ合いを生み、しいては会の自然に対する甘さを生みだしてしまった。

すなわち会員個々の認識の欠如の問題であると同時に

#### 六、協力者芳名（順不同、敬称略）



#### 七、事故処理会計報告



個人サイドで全て活動の安全性、充実がなされていくと考えるのでは、このような矛盾を生み、対自然活動を行なう上で甘さをまぬがれない会となり、責任ある会として活動できるものではないと反省された。

今後、我々が責任ある会として活動を行っていくには

その活動は危険を背にしているものであるから、会は会員にその自覚を促す為にとどまらずそれを確実なものにする為、裏づけとなるシステムを必要とする。それが活動を行なっていく会としての責任であり義務である。

すなわち技術、知識の養成を会レベルの計画をもって行い審査機構を整備し、会員の体力の維持向上を念として推しすすめ、会員を把握するシステムをもつことが必要である。これらのこととは、会員が真に理念を生かした活動を安全に充実して行うために会として保障しなければならないものである。

又、今後会員間における厳しい相互批判のもとに自然活動を行う者としてその意識をすべての会員個々人が自覚しなければならない。そしてその意識を今後永続させ、向上させるために例会、各回生ミーティングなどの場で批判の精神というものを定着させる努力が必要である。

交通費（電車代、タクシー代等）

宿泊費	210、230円
救援謝礼金	113、450円
バス代	295、985円
香典	150、000円
葬祭関係費（生花代、果物代）	100、000円
その他	100、820円
合計	990、170円
	19、685円

なお、御遺族からも御協力金を頂きました。

## 陽子ちゃんへ

### 黒田小学校 同級生一同

二十人の同級生が卒業後、それぞれの道を進んできました。十九年間の歩みを土台として、みんな更に大きくなはばたこうとしていた矢先、この様な突然の悲しい事故で陽子ちゃんが亡くなられたことを聞いて、私達は、なすすべもなく、ただ茫然としています。その間に私達が陽子ちゃんと過ごしたのは、小学校時代だけでしたが、

が忘れられなくて、また山に登ると、私達に話してくれましたね。私達が経験できないような、すばらしい経験をしたわけですが、陽子ちゃんの目標であるはずの山が、

反対に陽子ちゃんを帰らぬ人にするなんて、山登りの好きな人は、山で死ねたら本望だ、などという言葉を簡単によりしますが、山を知らない私達にとっては、あまりにも、むごく、悲しい言葉となつて、今現実にかえつてきました。

私達は、陽子ちゃんの明るい笑顔を、もう見ることができません。陽子ちゃんの楽しい話を、聞くことができません。十九才になつて、少しおしゃれをする年頃になって、これからという時に、私達はもう、陽子ちゃんの姿を、みることができません。でも、私達の心の中には、そんなあなたの姿が、今も、またこれからも、ずっと生きつづけるでしょう。このような言葉をいくら並べても、私達の悲しみは、語り尽くすことはできません、陽子ちゃんのぶんまで精一杯、生きることを誓い、陽子ちゃんの御冥福を祈ります。安らかに眠つてください。そして、私達のことをいつまでも見守つて下さい。陽子ちゃん、さようなら。

昭和五十二年十月二十二日

## 陽子

由村俊道  
由村アイ子

昭和五二年一〇月一六日、それは私共夫婦にとって、人生を大きくつがえしてしまった運命の日でした。

「行ってきます。」「気をつけて行きや。」

「うん。降りたら電話するしな。」  
あんなに元気に、胸に赤嶽神社のお守りをいだいて家を出て行つた陽子。三日目にしてこんなにも変り果てた姿で親の前に現れようとは……。いくら呼んでも叫んでもついに帰らぬ客となつてしまつたのです。

陽子が生まれたのは、昭和三三年九月九日、京北病院の一室で、とっても天気のいい日でした。妊娠中の栄養に心がけた甲斐あってか、三kg八〇〇の大きい子でした。発育もよかつたのか見舞つてくださった方々が、生後一ヵ月位の感じだと言つてくださつたものでした。

太陽のように明かるく、暖かく、人に喜ばれる存在であつてほしいなどと考へて陽子と名づけました。陽子は

その頃のあなたは、太陽のように明るく元気でしたね。

花背や灰屋に自転車で遠乗りしていた陽子ちゃんの活潑な姿が、今も目に浮かびます。六年生の時、動物好きな陽子ちゃんは、犬の頭をなでて、その犬に手をかまれるという恐い経験がありましたね。そんな、楽しいことや、恐いことも小学校時代の大切な思い出となりました。そして、中学、高校と学校は違いましたが、帰つて来た時も、今までと変わりなく、楽しく学校生活のこと語り合いました。陽子ちゃんが帰つてくるのが、とても楽しみでした。今年からは、黒田に残つていた人もほとんどの就職、進学のため、黒田を離れてしまいました。それなのに、今年のお盆は、久しぶりに顔を合わせることができ、お正月には、みんな集まる機会をもとうか、などと、相談していたのに、あれが最後になるなんて、誰が想像したでしょう。私達は、若きゆえに無謀な冒険もし、苦しみや悲しみも乗り越えてくることができました。でも今、一人の友の死を目の前にして、人の命のはかなしさを、しみじみと感じています。今考えると、陽子ちゃんの冒險好きな性格が、あなたを山へ誘つたのかも知れません。夏に、三千メートル級の山に登つて、頂上に達した時、この山を征服したという、すがすがしい気持ち

その後看護婦さんも感心される位ミルクもよくのんで、まるまる太り、これといった病気もせず、ぐんぐん成長を継みました。満一年の時には、赤ちゃんコンクールで女児中郡一位という表彰も受けた程でした。言葉も早く覚えましたし、にこにことよく笑って元気に育つて行きました。子守をしてくださったおばちゃん達も、この子はかしこい、いい子やとよくほめさせてもらいました。父親はその成長の過程を写真に収め、母は記録にとって喜び合っていました。

満四才になって保育園に入園させることにしました。バスに乗って通園するわけですが、兄弟がない上にあまり近所の子と遊ばせてなかつた関係上、通園をいやがりよく泣きました。泣きながらバスに乗る子は、他にも、二、三あつたものですから、大した心配というわけではなかつたのですが、やはりその時は私共も困り、どうしたらいいものかと考えた末、児童相談所陽子を連れて相談に行きました。いろいろ調べてくださった結果、「心配することはありません。上手に育つていられるいいお子さんです。保育園を嫌がるのは、今まで子供同志の遊び方が足りなかつたためで、保育園へ通わされたのは大変いことです。」

がうから。なぜなら自分は騎兵でたくさんの馬の世話を

していたが、優秀な馬は皆毛の艶がちがう。人間でも同じや。」などと言つてくださいました。

級友の中で論争が起つた場合には、その渦中には入つて解決の方策を考えようとする様な態度はなかつた様で、我聞せずと言つた逃避的とも言える態度をとつていた様です。

先生は

「陽子ちゃんに向かってくつてかかる子は誰もいなけれど、論争になつた様な場合は、自分はこう思うと言つた意見を述べて積極的に問題解決に取りくんではほしい。」と言われたこともありました。この辺は一人子としての性格の弱さがあつたのかも知れません。

小学校在学中に一つ心配したこととは、放課後友達と共に写生をしていて犬に噛まれたことでした。なでてやりたいと思つて手をさしのべたその指を突然がくんと噛んだのです。その犬は鑑札をつけていなかつたので、狂犬病などになりはしないかと病院へ連れて行つたり大変心配しました。が幸い病菌はなく、可成り大きな傷でしたが、それも案外早くよくなつたので、ほつと致しました。陽子自身もこの時の友達の親切や養護の先生、お医者さ

と言つてくださいました。保育園の先生も、「家でばかり大事に育てられている子は、よく保育園を嫌がることがあります。親ごさんとしては気になることは思いますが、そのうちに馴れてきてよく遊べるようになりますから。」

「よいよ小学校へ入学となりました。陽子は親の心配をよそに、見違える程よろこび勇んで登校する様になりました。いつも大きな声でさそつててくれる友達の声を待ち遠しげに、ランドセルを背負つて駆け出して行きました。そして

「お母ちゃん学校は楽しいわ。お勉強はみな好きや。」

と言う程になりました。

それから六年間、病氣らしい病氣もなく、健康に恵まれて通学することができました。その間5人の先生に担任していただきましたが、明朗でユーモアもあり、級の人気者とか、理解力思考力抜群だとかたくさんのおほめの言葉をいただきました。近所の人の中にも「陽子ちゃんは優秀な子に違ひない。陽子ちゃんの毛髪の艶はち

んのお世話に對して、感謝の念を抱いていました。

ことはありませんでした。

中学においても担任の先生からは、よく努力するとは認めもらつたこともありました。また友達から無記名でその人の長所短所を書いて渡して貰うということが行なわれた場合、陽子も大勢のお友達から貰つていましたが、明朗だ。いつもにこにこしている。ユーモアがある。誰とでもわけへだてなくよく話してくれる。由村さんには欠点というものが見つからない。等々ほめてもらつてばかりの様でした。

高等学校の先生からも、明朗でよく努力すると書いて貰つていました。

家庭においては、土曜、日曜を除く日はいつも学校から帰ると買物をし、夕食の調理をして父母の帰りを待つていてくれました。遠くへ通勤する母親を頼つていることもできないと思ったためでしょう。ちつとも不平を言わず、少しでも珍しい調理をしようと調理の本を調べながら、よくやつてくれました。私も試験の日などかわいそうだなと思うことはありながらも、陽子の将来に役立

つことなんだからと分担させていました。登山のトレーニングに行く日も一度帰宅して炊事をしておいてから出かけるといった状態でした。

高校三年では、大学入試の勉強もしなければならないし、相當忙しい様子でした。しかしこれも頑張って、京都女子大、関西大学、立命館大学と三つの大学に合格しました。本人の喜びは勿論、私共も本当に嬉しいでした。ささやかながら鯛など買って祝福致しました。立命館大学が近くもあり、憧れの学校でもあったので、ここを選びました。

そして四月一〇日、立命館大学、文学部心理学専攻一回生としての陽子の学生生活がはじまりました。そしてサークルとしてワンドーフォーゲルに入部したのでした。これが命を落とすものとなるとは、誰が予測し得たでしょう。毎日のように衣笠山や賀茂川べりでトレーニングに励んでいました。身体もずんずん逞ましいものになつて来た様に思われました。ところが陽子にとってそれは四回目の登山でした。

一〇月一六日午後、突如、大学ワングル部からの電話で陽子遭難の知らせ。続いて大学に来いとのこと。取るものも取りあえず出向いて行つたのです。どうか傷は軽

から帰つたある晩のコンバのとき、電話でもうすぐ帰るからと三回程伝えながら待つても待つても帰つてこないのです。一二時過ぎてからお友達の電話で

「陽子さんは責任もってあずかりますから、ひと晩とめてあげてください。」と、「それは絶対お断りです。どれ程心配して待つていてるか親の気持ちを察してください。」

それから三〇分程して一時すぎにタクシーで送られて来た陽子は、酔っぱらっていました。呑ませたと言つてましたので呑まなければいいと言つて叱つたのです。この時きっぱりワングルを止めさせるべきだと思つたのです。しかし陽子が二年間だけ行かせてほしい。冬は絶対行かないから。そして三年目から勉強に頑張る。と言いましたので、若い時の楽しみでもあり、友達との協力を学び、苦労をのり超えて登り得た山の美しさ、自然の雄大さに心うたれ、成功感にひたるのも悪くはなからう、と思い無理に否定はしませんでした。

しかし二六kgと言う陽子の力の限界を超えた重い荷物、男の友達に迷惑をかけまい、おくれをとるまいと頑張った陽子。六時半から歩き始めて一二時過ぎまで。お腹もすききっていたことでしょう。疲れていたことでしょう。

くてすんでいます様にと神に一心に祈りながら。しかし搜索隊に出でもらつて探してもらつて。三時、三時半と待つている時間の長さ。秋の日は短く暮れかかるります。どうしよう。どうしようもありません。こんなに長時間見つからないなんて。もしかして出血多量で命が……。胸の動悸は高まるばかり。

ついに遺体確認の報。溢れる涙をどうすることもできませんでした。でもまだ信じ切れず、現地に向う汽車の中でも、どうか誤報でありますように。怪我はしているけれど命はあった。あります様にと念じ続けていました。けれどこの一縷の望みもついに絶ち切られてしまつたのです。

小さい時からお茶碗を割るという様な事も殆どなく、毎日炊事をしていても指を切るなどの失敗も殆ど見られない子でした。それなのに一度の失敗が命を落とす結果に結びつくとは……。

勉強したり、家事をしたり、玄琢自動車学校へ通い卒業したり、自分なりに精一杯の努力で生きて来た様に思います。こうした陽子に親の私共は喜びと生きる希望を与えられながら生きてきました。山へ行くことも一度はきつくなつました。それは北ア

また雨の後で足もとは滑り易かつたでしょう。悪条件が重なつて、ついにとり返しのつかぬ結果を招いたものと思われます。

親としては、人生は努力して生きねばならぬものとは無言のうちに教えたつもりでした。しかし死ぬ程頑張れとは毛頭教えるつもりはなかつたのです。

陽子の亡くなつてしまつた後、愕然とした私共は、思ふまいとしても、どうしても思い出されて来て、にじむ涙に胸の痛むのをどうすることも出来ません。全身の脱力感に打ちのめされ、何を考える気力も何をする体力も失っています。世の多くの親がそうでありますように、私共が全身全霊をつくして育てて來た子供です。そぞつたつた一つの宝だったのです。それを亡くしてしまつた今、私共の世の中はひっくり返つてしまつたのです。何を目標にし、何を希望に生きて行こうかと悩み続けています。

けれども漸くにして、こうなつてしまつた今となつては、私共に残された道は、あの子がどうか安らかに眠れますように、あの世では道を間違はず進みますようにと、灯をかかげてやることだと思い直し、多くの人々に温かく支えられながら、やつと生きる決心がつきました。

終わりになりましたが、この追悼集を編集してくださった方々、またご投稿くださった方々に厚く御礼申し上げます。

## よっしんへ

友人 奥村純子

よっしんが逝ってしまったから、もう半年近くたちました。季節が変わり、一日一日が過ぎていくことに「去年の今頃、二人でこんなことをしたなあ」などという思い出が、止めどなくうかんできます。中三の時、同じクラスになって以来、よっしんは私にとって、悩みを打ち明ける相談相手として、一緒にいたずらをするよき悪友として、かけがえのないお友達でした。

加茂川中学の教室で、はじめてよっしんを見た時、騒がしい授業中にただ一人、最前列に陣どって、熱心に先生の声に耳を傾けているのが印象的でした。しかし、休み時間になると、打って変わって、陽気な声で笑い、いたずらの計画には、一番にとっぴなことをいいだし、みんなを楽しませるのも、よっしん、あなたでした。卒

今では、なつかしいさびしい「思い出」と、なってしました。長い休みになると、すぐいなかに帰ってしまつて、物足りなく思つたけれど、いなかの友達との、恒例のパーティーのようすを、詳細に書いてくれたはがきを読むのも、楽しみの一つだったのに、もう、それも、もらうことができないのですか？

が、今、この、よっしんへの最後の手紙を書きながらも、ひょいと電話がかかってきて、明るい笑い声をきかせてくれるのは、という期待を、やはり捨てる事ができません。

## 私たちの心の中に生きている 由村陽子先輩

紫野高校茶道部 後輩一同

陽子先輩と私たちとの最初の出会いは、茶道部の中ででした。はじめは新入生が一人だけという寂しいものでした。先輩たちは盛大にコンパをやつて下さいました。そして文化祭も終わるころになり、ようやく部員がふえその時点で、新しい部長、副部長が決まりました。

業前に、預金がしてみたくて、二人で、クラスのみんなから集めた、百円ばっかりのお金を持って、加茂中三年一組なんて大層な名前で、銀行に行つたこともありましたね。

気球に乗つて空を飛びたいなどと、男の子みたいな夢をもつたり、そうかと思えば「人と別れた後の寂しさに耐えられない」なんておセンチなどを書いてよこして私を驚かせたりもしました。おぼえている？高二の春休み、些細なことでけんかして、人目もはばからず、堤防で泣きあつたこと。あの時、はじめて、よっしんが涙もろい一面をもつてゐるのに気付いて、ちょっとびり意外でした。なぜなら、私から見ると、よっしんは、いつも元氣に活動している、スーパーレディー的存在だったからです。高校に入つても、厳しい私立を行つた私には、公立の自由な雰囲気の中で、思いきり、高校生活を楽しんでいるよっしんが、とてもまぶしく、うらやましく思えました。高校三年間、特に高三の、受験をひかえた一年間に、よっしんからもらった手紙は、もう六十通にもなっています。学校でのおもしろい出来事や、読んだ本の感想などをきかせてくれた、ユーモアあふれる文面の一言一言、特徴のある角ばつた字で書かれた一字一字が、

陽子先輩は茶道部の印象とはおよそかけ離れた人のよう位思われました。けれども後輩や同年以上の人に対しても、人一倍思いやりのある人でした。無理に作ったやさしさでなくて、陽子先輩の人柄を物語るように、内面からわき出てくるようなやさしさであったことを、はっきりとおぼえています。

こんなことがありました。部会の時です。ちょっとしたことから部長さんが、顧問の先生に何かを言われて、司会を続けられなくなつた時です。陽子先輩はすかさず部長さんをはげまし、部長さんの方も気をとり直して、そのまま会が続行されました。私たちは当時一年生でしたかも突然の部長さんの涙を見て、おろおろしてしまい一言も口がきけない状態でした。そんな時の陽子先輩の落ちついたごく自然の態度が今でも強く心に残っています。

です。

陽子先輩の事故を知られた時、とても信じられませんでした。でも先輩の家で、写真を前にしてお母様のお話を聞いているうちに本当のことなのだなあと想いはじめました。私たちは短かい間の接触でしたが、不思議なほどに先輩のことをはっきりとおぼえています。お世辞などではなくて、先輩は人間的にもよくできた人だと思いません。ただ残念に思うことは、もう少し長く先輩と接していらっしゃたら、先輩が山を愛していたということを知ることができたでしようといふことです。本当は先輩は人一倍、寂しい人なのではないでしょうか？今の私たちには、推察することしかできません。でもこれだけははつきりと言えます。先輩の死を無駄にしてはいけないということです。陽子先輩は人間にとつて何が一番大切であるかを私たちに教えて下さったように思えます。

どんな山でもいい、低くてもゆるやかでもいい、陽子

先輩が愛した山を、私たちもいつか、登ってみようと思います。

## YOKO

by (HNM)

代表 樋 岡 美津子

陽子 初めて逢った時

君 ニコニコ微笑んでた

ただでさえ細いその目を 一層細くして

こぼれんばかりの笑い顔だった

朝 自転車にまたがって

眼そうな目をしていた陽子

背中を 力一杯 ぶつっていく君は

朝陽の中でも 笑つてた

覚えてるだろうか

教室中に響きわたる その声

笑い袋のようだなんて言つて

また笑つた 無邪気な あの頃を

山が好きで お酒が好きで

就中 信州の山と日本酒

飲むだけ飲んで くだまき

しゃべりまくったあの日のことを

## 今、太陽の光に

心理一回生 高瀬恵子

ようこ——今ははっきりと浮かぶわ、あなたの笑顔。

私のまぶたの中にいるあなたは、ウッドストックのよう

な髪にまるい顔、こぼれそうな笑いに細くなつた目、

それになぜかきまつてオーバーオールを着ているの。お

どけた声で、「ホンマか。」そして、ミニサイクルをさつ

そうとこぎ出すの。仏語には、お互い悩ませてたつて、

飲みに行つたこともあつたつけ……。今、こんなふうに

思い出をつづつても、どうしようもないかもしれない。

でも、今、あなたは太陽の光。あなたの輝きを、誰かに

伝えてもいいでしょ？

ようこを見ると、人間は決して一人じゃないってい

う気がした。力を合わせて、何か大きな事を成しとげる

喜びを知っているんだなあって思った。あれは確かにクラ

スコンバの時だったつけ。熱っぽい口調で、つらくても

苦しくともドジなことやつても、仲間なんだからがんば

れよ、そんな言葉に涙がこぼれそうになつたって言つて

笑顔の素晴らしい お前さんに

人生は 回転木馬のような すれ違い

陽子らしい微笑の中で……

来世にて 共に生ぜんことを祈りて……

いた。その時、ああ、うらやましいと思つた。素晴らしい仲間がいるから。そして、ようこもきっと、そんな言葉を心からかけてあげることのできる、真のやさしさのある人だと思った。

## ヨーコに

### あなたは太陽の光

坊や、目を開けてごらん  
オレンジ色の光

甘ずっぱい香りのする光  
ママがまだ二〇歳にならない頃  
この太陽のような

友だちがいたの

山を愛していた人々の

だから今でも

太陽の光になって

山におはようあいさつしているの

ほら見てごらん  
お花も虫たちもみんな

太陽にはほえみかえしているわ

もう、ためらわずに「ヨーコ」と呼べるようになりました。

初めての前期試験では、受験科目が同じだったので、試験の空き時間を利用しようと図書室へ向つたけれど、満席で入れなかつたため、仕方なく、二人で茶店で本を開けた事もありましたね。ヨーコは、ココアを飲みながら、一生懸命に本を暗記していました。大学の試験では、友だちに頼る人も多いのに、独力で、しかも、明るい表情で頑張るヨーコを見て、不思議な魅力を感じたものです。

やつとの思いで試験を終えた後、私たちは約束通りみんなでお酒を飲みに行つた事がありました。あれは、九月の末の小雨の日でした。

思わず解放感にひたつて、楽しい気分でボトルをたくさんあけてしまいましたね。ヨーコは、お酒に強かつたけれど、この日は大部酔つてしまつて、「シャンとせなあかん」と眠そうな目で笑いながら言つていた姿が印象的でした。

男っぽい所もあつたけれど、さりげない優しさを持ち、きさくで、いつもニコニコしていたヨーコでした。そう、太陽みたいに。

### 心理一回生 井上妙子

私がヨーコを知ったのは、去年の四月大学に入学してからでした。

同じグループで、気の合つた者同志として一緒に居る時間は長かつたけれど、最初私は、みんなのように気安く「ヨーコ」と口に出来ず、「由村さん」と呼んでいた事を覚えています。

たぶん、ヨーコを行動的で現代的な女性だと思い込み、ヨーコのさりげない優しさや強さに気付かなかつたからかもしれません。

でも、前期試験が近づき、私も、一般教養の講義に足を運ぶようになった頃、ヨーコがずっと眞面目に講義に出席しているのを知って、ヨーコは意志が強く向上心を持った人だと氣付き始めました。また、体育が終わつた後など、ヨーコの御自慢のチャリンコの後ろに乗せてもらい、存心館での授業を二人で受けに行つた事もたびたびでしたね。その時期から、ヨーコと一層親しくなり、お酒を飲んでいても、いつもと同じで、ぐち一つ聞いていた覚えはありませんでした。

そんな元気で明るいヨーコがいなくなつたなんて、今でも信じられないのは私だけでしょうか。

ヨーコの最後の旅立ちの数日前、ヨーコと高瀬さんと私の三人で、語学の休講の間に、ヨーコの送行会と称して、茶店でしゃべりこんだ事もありましたね。そこで私は、「どうして山に登るの。頂上には何があるの。」とヨーコに質問した事、覚えてますか。ヨーコは笑つていました。「山の頂上には疲れだけがあるのと違うの」と言うと、「シビアやなあ。そうかもしれないけど。」と言いつつも、私たちの知る事ができない山の良さについて語ってくれました。そして、「元気で帰つてきて。」という私たちに、「大丈夫、大丈夫。」と笑つて答えてくれたから、安心してヨーコと別れたのです。

高瀬さんが、しばしのお別れの印しとしてヨーコのために買ったキャラメルのおまけを見て、三人で笑い合っていたのは、まるで夢のようにも感じられます。いつまでも、ヨーコの笑顔を見られると思つていた私でした。赤いスリムのジーパンが似合い、チャリンコに生き生きと乗つていたヨーコ、いつもニコニコしてどんな事も

サラッと流してくれたヨーコ、一番元気そうな様子で、困難をも打ち碎いてしまう不思議な力を持っていたヨコ。

そんなあなたが、山で帰らぬ人となつたなんて、私は、まだ信じられないのです。

バスの窓から、赤いジーンズで自転車に乗っている人を見るたびに、ヨーコのような気がして、語学の授業で先生が「由村さん」と呼ぶと、ヨーコの元気の良い返事が戻つてくるようだ……。

ヨーコは、明る過ぎたから、素直すぎたからいけないのかも知れません。憎まれる人が生き伸びられるなんて、人生の皮肉のようにも思えます。私は、そんな一人だから、そんな人間の一人として、ヨーコが教え与えてくれた明るさを胸に刻み込もうと思つています。

だけど、ヨーコ、もう一度あなたの笑顔が見たかった。もう少し私たちの側に居て、あなたの明るさを私たちに分けてほしかった。

今となつては何を言つても仕方ないのですね。せめて、私たちの事を忘れずに、ニコニコ見守つていて下さい。私たちの心の中で、ヨーコはいつも元気に生きていますから。

十月十六日午後六時、事故発生の最初の報せを受けた。電話をくれた二回生の人のいう言葉がまつたく信じられず、受話器を持つ手を震わせながら何回も聞きなおしたのだ。この日僕は、ワングルの先輩と楽しい一日を通して、そのあとこの悲報でまるで地獄へ突き落されるような思いであった。この二日前、京都駅で車窓から人なつっこく手を振る由村君や他のメンバーを見送る時にかけたエールや校歌も今となつてはむなしく思い出されただけだ。

由村君は底抜けに明るく笑顔の絶えない人でまさに、はしが倒れてもおかしい年頃の娘さんであった。だから今までに浮かぶのは彼女の届かない笑顔ばかりだ。また彼女は新人の中ではよりも積極的に活動に参加し、山に対する意欲には男の僕でさえ圧倒されていた。そしてまた由村君の根性はとても有名で、トレーニングや山行中苦しくなると「チクショウ」「バカヤロウ」などとつぶやきながら自分自身を励し、決して自分を甘やかしたりなどしなかつたそうである。彼女といっしょに山へ行つたことのない僕にはあまり多くは語れないが、そん

な彼女の態度には先輩方も一目おいている様子であった。

そういう意味でも今回の事故で彼女の若い命が失われたことは本人にとつても決して本望ではなかつたと信じるけれども、これからワングルをしょつてたつ僕たちにとつても又、何よりも大きな損失であった。惜しい人間がいなくなつたと思う。いや惜しいなどというだけではすまない。バカヤロウ、なぜ死んだとどなりつけてやりたい気持ちだ。

たしかに大自然は強いのに、人間は弱少なのだから、僕たちが敗れるのは当然かもしれない。しかし、そう思つてあきらめてみても地上に残されて不慮の死を悼む人の悲しみ、嘆き、物心両面の損失の深さ大きさは測りしれない。そして、その深い悲しみ、嘆きのうちに、遭難を未然に防ぐ動因が、山で死ぬことの空しさへの省察が潜んでいると信じたい。そして、このような悲劇を繰り返さないように、自然の厳しさ、人命の尊さを改めて胸に深くきざみこみ、僕たちの自然活動をさらに発展させていかなくてはならないと考えている。由村君の靈を慰めるために僕たちができる唯一の事だと思うから。

#### 文学部一回生 沼田恵子

ワングルに入り、由村さんを知り、わずか数ヶ月間の交遊。

それでもいろんな事が、思い出として残つてゐる。いつだつたか、何故きつい山ばかり登るのかときいたことがある。そしたら、いつものあの笑顔でにつと笑つて、「好きなんや、しんどい山が。」といとも簡単そうに答えた。

二回生になつたら、姑根性をだして、一回生をおおいに、いびつてやろうと陰険なミィーティングをやつたこともある。

加茂川で一人で、よく自主トレをやつていた。P.W前に、二人で自主トレやつたら、お互いに意地をはつて、やめようと言わないものだから、かなりきついトレーニングになつてばつたこともある。

夏合宿の不帰の嶮で、はしごで足をすべらせた時も、みんなの真青な顔を尻目に、につと笑い返していた。秋のP.Wに上越が出た時、やつと念願かなつて行けるという感じで、私にもいづしょに行こうとさそつてくれた。

女子合宿では、「私が装備をやらないと、他の人は細いから可哀そうだ。」と言っていた。

お酒を飲んでは先輩にからんでいた。

私が尾瀬に行き、由村さん、今あのあたりかなあと、

上越の山々をぼんやり見ていた頃、あなたは、もうこの世の人ではなかつた……。

なんとなく聞きながしていた由村さんの言葉の中に、彼女がどれだけワングルに、熱意をもつっていたかが、はつきりと表わされていた。

彼女は、毎日を真剣に、精一杯生きることのできる数少ない人の一人であつたと思う。

正直な話、由村さんという友の死を、どうとらえていいのか、事故後、何カ月もたつた今でもよくわからない。直接その死を見たわけではないから、その死さえ信じきれない。

電車の中で、よく似た人など見かけて、はつとすることも一度や二度ではない。BOXへ行けば、あの笑顔が見られるのでは……と思うのは、私だけではないだろう。とにかく今、私にできることは、山に登ること、精一杯努力して登ることだけだ。

由村さん、空の上から私達を見まもつていて下さい。

二度と、事故を起こさぬように。

## 由村さんの面影

文学部三回生 片野泰子

卯月：鳥のさえずりとともに、水はねるみ山も春めく頃、キャンバスは受験から解放され新たな希望と不安で胸をふくらませた新入生で活気づいていた頃、我会も新人を迎えた。……由村さんの底ぬけに明るい第一印象。

はつらつとした態度、愛くるしい笑顔は、ぶっきら棒で不愛想者が多い我会の中で、まさに野に咲くたんぽぽの花の如くであった。

水無月：うつとうしい雨で憂うつな毎日が続きそれなくとも、ふさぎ込みがちであるのに、PWの中止や風しんがはびこって我会全体も何か沈みがちであった。

そうした雰囲気の中で由村さんのすがすがしい声と共にうらやましいまでに純粋な彼女の自然観や「山」に対する情熱は、梅雨期の晴れた空がすがすがしい如くであった。

葉月：額に輝く汗も快く、山に里に参加した夏合宿。

### 二度山行を共にしました。

長い合宿の疲労と思いを秘めて謡歌しあつた集結地。日にやけた顔、赤々と燃え立つファイヤー、高らかに闇夜にひびく歌声。あらん限りの声をはりあげ夢中で歌う彼女の横顔。合宿の思い出を目撃させて語る彼女の姿はまさに八月の太陽の日ざしの如くであった。

神無月：山の紅葉の色づきが気になる頃、前期試験も終り秋山に向う仲間をうらやましく思つていた頃、上越の山々とことさら熱心に語つていた彼女の表情は忘れられない。

たつた半年のうちにしてこうも情熱的に活動した彼女が逝つてしまつとは仮様以外にだれが予測できたであろう。

運命のいたずらとはこうも無残で散々なものなのだろう。我会に暗く重くるしい空気が漂う中で、彼女の在りし日のあの笑顔が鮮明であるが故に月日が流れても、うまれることなく、心の中に残つている。

文学部二回生 鈴木直子

由村さんは、北山での新人合宿と八ヶ岳縦走PWの

新人合宿の際、皆子山の登りの途中で由村さんは、必死の奮闘にもかかわらず遂に一步も歩けなくなつてしまいダウンをとつたことがあつたのですが、顔についた泥をぬぐいもせず、くやし涙をボロボロ流す彼女の姿が今まで忘れられません。

そんな由村さんのガンバリ屋の面目躍如としたのが初めてのPWである八ヶ岳縦走であったと思います。トレーニングでも山行でも（このような言い方をすると、由村さんは、いやがるでしょうねけれど）まったくなりふりかまわずがんばっていました。彼女の元気さに他のメンバーは目を見張りましたが、なにより彼女自身ある程度の自信を持つたようでした。そして、山に対する意欲も強くなつたらしく、上越の山に登つてみたいと夏合宿前から言つていました。

それほど望んでいた山行でこのような事故が起つたんで私は言つかりません。

山行以外、普段の生活においても由村さんと仕事をしたり、話をしたりする機会が多かつたのですが、ケラケラとよく笑い、冗談をポンポン言う、まったく明るい人でした。そしてまた、手際がよく、テキパキと動ける人

でもありました。

もとより私は、ある時、垣間見た由村さんの小さな断片を拾い集めることしかできないのだけれど、その一片に彼女の溢れるような明るさと、キラキラ輝く若さと、張りつめた生命の充実が、見えるような気がします。由村さんの真摯な姿勢が私の魂に数滴の清醇なしづくをもたらしてくれたことを感謝し、どうか由村さんの眠りが安らかでありますようにと祈るだけです。

## 「追悼」

法学部二回生 中山拓美

「何事も偽り多き世の中に死ぬことばかりまことなりけり」こんな短歌が、しみじみと感じられる今日この頃です。

彼女との出会いは四月、そう、広小路での新人勧誘の出店でした。思えば、初めて彼女にワンゲルの説明をし、入会を勧めたのはこの私だったのです。友達三人程とお店の前を通りかかった時、一人立ち止まって出店の方を

うのですから。やがてその驚きは「ファイトのある女の子だなあ。」というような、尊敬の念とも言うべき感情へと変っていきました。  
もう少し荷が軽かしたら、あそこで休んでいたら、もつと口やかましく注意を与えていたら……。仮定は限りなく続き、只残るのは空虚な悔恨だけです。ボックスの吹きさらしの青いベンチに座る時、キャンバスを孤り歩く時、清心館の階段を登る時、下宿でこたつにはいり煙草の煙を吐き出す時、何につけフットと由村君の笑い顔が浮かびます。そしてだらだらと毎日を過している自分を顧み、只々悔恨……。

コスモス揺らしてやつてきた風は

黒い煙を南になびかせる

汗のしみこんだ山シャツ

赤い靴ひものちぎれたドタ靴

そして

どす黒いものがにじんだTシャツも

みんな

赤い炎に包まれて

今でも人一倍頑張り屋だった君の歯をくいしばって山

を登る姿を思い出す。

僕は末だに君が死んでしまったという事を実感として受け止めることができず、街を歩いている同じ様な年頃の、背格好の人を見る度にその中に君が居るのではないかと捜してしまう。君はたぶん人生の中で一番美しいであろう時に、その時を充分に過ごすこともなく帰らぬ人となってしまった。

法学部二回生 伊藤一彦

白い灰と  
黒い煙になつてゆく

煙は一筋  
ゆつくり

ゆつくり

山々に向つた

(十月十七日 遺品焼却)

由村陽子君——心光院秋岳麗陽大姉

安らかに、安らかに、安らかに眠り給え。

見つめている彼女をいちはやく見つけ、他のサークルにとられてなるかとばかり、「ま、説明だけでも、山のアルバムもありますから……。」と半ば強引にイスに座らせたのでした。広小路での説明会にも出席したようです。彼女との思い出を述ると、何故か酒の話しが多くなつてしまいますが、あれは四月の下旬、新人合宿を控え、何かとあわただしい頃だったと思います。会で発行している雑誌「ヤンレー」の印刷を手伝い、終った後近くの喫茶店に行きました。雑談ののち、上回生の提案で四条のおでん屋に行くことになりました。始めは静かにビールを飲み、我々の馬鹿話に耳を傾けていた彼女も、酔いがまわるにつれ饒舌になりました。そしてついには、泣いたり、とたんに笑い出したり、全く閉口してしまいました。この一夜以来、彼女の酒癖と共にその名前はワンゲル中に広まつたのでした。

その後、彼女と接する機会は余りなかつたのですが、新人の中では男子会員を含めてかなり積極的に参加していました。そして今回のパーソン。広小路ボックスのパーソン用紙に彼女の名前を見た時、少々驚きました。男子会員でさえ敬遠しがちなこのパーソンに、彼女が参加するとい

事故が起った後、僕等は一生懸命に一刻も早く君を見つけようと谷を搜索した。それが僕等に出来る精一杯の事だった。けれど同じパーティのメンバーとして、すぐ後を歩いていた僕が君が落ちていくのを何の為すすべもなく見ているしかなかった事に今は後悔と自分の無力さに対する憤りの気持ちで一杯だ。君のあのとことん頑張る性格や、腰痛膝痛、そして体力についても、もう少し知っていたなら何らかの配慮や注意を促す言葉をかけることが出来たはずだし、その点で事故は起こらなかつただろうと思う。数少ない女子会員の中でもその持前の明るさでとても目立っていたし、活動に対する熱心さから言っても、リーダー層になつた後はきっと会の活動を中心になって行なう人になつたろうと思う。

今、会では君の事故が与えてくれた教訓から、二〇年来数多くの先輩方が育んできた諸々の事柄を見つめ直し、僕等がその中で失つてしまつた物や不備であった点を見つけ、検討し、二度とこの様な事故を起こさない為の体制を会の中に作り上げようとしている。

君の事をいつまでも忘れず、安全に会が運営されいかなければならない事を個々の会員が認識し、実践していく事が君の死に報いる最良の方法であると思う。

冥福をいのります。

## 由村陽子さんを悼んで

文学部三回生 安 原 稔

僕は再び彼女の笑顔が待っているはずだと思いながら登つていった。明るくなつてきた空が、僕にそんな思いを持たせたのかもしれない。しかし待つていた事実は違つていた。「まだ見つからない」という返事が、遠くから聞えた時、それが嘘であつて欲しいとしか願えなかつた。冷静になろうとすればするほど彼女の笑顔が脳裡から消えてゆきそうであった。残つて彼女を捲していた川崎達の沈うつな表情を見た時絶望感が背筋を走つていった。そして、彼女の遺体を目の前にして、重苦しい無言の時間があった。皆んなの胸に去来していたのは、多分彼女の笑つた時の顔を思い出していたのだろうが。夜になつて、あまりに皮肉なめぐり合わせであろうか、夜空が彼女を満天の星でむかえていた。

由村君のクラブでの初山行は、新人合宿であった。あの時の彼女のガンバリズムには、僕は感動をさえおぼえ

## 由村陽子君を悼んで

経営学部二回生 後 藤 繁 里

た。真黒になりながらも、皆子山のピークを目指して必死に登つていったあの姿は、いまま頭の中に強く焼きついている。

彼女の生命がわずか一九歳で消えてしまつた。何のにも変えがたい一人の命を奪つてしまつたことに對して悔悟だけではすまされないものがある。僕らのパーティが取つた行動や、また僕自身が取つた行動が、彼女を死に至らしめたと責められても、死という、一人間の命を失わしてしまつたという事実に対しても、たとえどんな御託を並べても弁解出来るものではない。特に僕自身、彼女のすぐ後を歩いていたが、由村君が新人であるため旧人である僕が彼女の後を歩いていた一彼女を転落させてしまつた。この時の指示の甘さが、彼女を死なせてしまったのである。様々な原因があつたが究極的にはこの時の指示が甘かつたのである。今となつては、帰らない彼女の命に対してもう眠つて下さいという言葉以外にはない。そして、二度とこのような悲しみを起こしてはならない。

由村さん、さよなら。安らかに眠つて下さい。

合掌

僕は、新人合宿・八ヶ岳PWのアルバムを開くたびに由村君の陽気で明るい笑顔と山行に對する情熱・ファイトを思い出します。新人合宿では、皆子山の急登で一度も動けなくなり、「チクショウ・バカヤロー」と何度も何度も自分自身を叱咤激励し、一步一步泥まみれになりながら登つていった。そしてサイト地に着くと、その苦労を少しも感じさせず、笑顔を絶やさなかつたことが非常に印象深く残っています。又、八ヶ岳PWでは、それまで北八ヶ岳の樹林帯の中を皆子山の急登と同様に登つていた由村君が、南八ヶ岳の岩場に入ったとたん軽快な足どりで登り始め、僕もあとをつくのが大変でした。いったいどこにそのようなファイトが残つていたのか自分自身不思議に思つた程でした。

そして、今回の上越PWに由村君が参加することを知り、由村君ならば“ど根性”があるし、大丈夫であろうと思つて疑ひませんでした。しかし、あのような痛まし

い事故死を遂げようとは……。あの朝もいつもと変わらずみんなの雑談に笑顔で答えていた由村君が、その数時間後にはもう二度と笑顔のみられない、帰らぬ人にならうとは……。

由村君を捜索に谷を下った時、ビバークの用意をして救助隊の来るのを待っている間、「絶対に彼女はどこかで元気でいる筈だ。いや元気でいるにちがいない。救助を待ち望んでいるにきまっている」と思い続けました。

しかし現実は、期待とは裏腹に全く予期せぬ形となつて僕の前に現われ、ただただ呆然と立ち竦んで頭をうなだれていました。未だに由村君の事故死は信じられません。陽気で、明るい笑顔を浮かべて帰つて来るような気がしてなりません。

今僕達に出来る唯一のことは、一刻も早く中荒沢に追悼碑を建て、由村君の靈を慰めることだけです。そして上越の山々が赤く色づく頃、きっとまた、由村君の陽気で明るい笑顔を思い出してしまうだろう。

### 法学部三回生 川崎光嗣

由村陽子君の事故死によつて、私は人の死というもの

に大きな衝撃を受けた。私は、人の命がどれだけ尊く、また、その厳肅さと比べてあまりにもはかないものということを知った。陽子君の死は單なる偶然的な事故死ではない。我々が自然を対象として活動する限り、偶然の事故なるものは決してありえない。事故は、我会のPW活動の中で起つたものだ。事故の瞬間において、すべてが我会の今までの矛盾と欠陥、そして我会のひとりひとりと結ばれている。事故は今までの我会の象徴なのだろうか。

私たちは、登山道を一步進むごとに自然に對して挑戦しているのだ。自然とは厳しく、おそろしいものだ。それを相手とする私たちは、自分たちは安易になりすぎていたのではないか、という疑問の上にたつて、自然を見つめ直さねばならない。そうして、私たちの会も、自然なるものを厳しく見つめられるような人間を創り出せることを目的とすることが大切だろう。

由村陽子君の事故はそのきっかけを私たちに与えてくれた。それ故、あまりにも尊い命であった。私たちは、再出発するにあたり、いつそう自分に厳しく、私たちが敗北した自然と向かい合える、りっぱな会を作り、活動していくかねばならない。

### 五二年（昭和）卒 石沢千秋

我会において、活動の根底にあったのは精神論である。員各個の自主的活動に基づく人格の涵養という規約二条の条文は、その事を如実に示している。この条文は、表面的には会員の活動を無制限に許容するが、その根底に会員間の精神的に緊密な関係を要求している。

したがつて我会における事故対策もまた会員相互の緊密な結びつきを根底にしていたわけである。つまり事故後の具体的な対策から逆算した合理的な安全対策ではなく、各パーティーにおいては個々の、また会全体としては各パーティーの相互の緊密なつながりをもつてしてはじめて成立するものであつて、それによつて事故の防止という互いの意識の醸成されることを必要としていた。

ここ数年、活動の幅を広げるということが叫ばれ、様々なPWが考案されて、また実行されるようになつてきました。この事自体は、むしろ経験主義的な会活動にとって多少の危険はあつても、喜ばしいことであった。しかしながら少しずつ、そうした活動について精神的連係がなくなる状況になつてきた。極端に言えば、俺は俺でやりたいことをやるから、お前は口を出すな。そのかわり俺

もお前のことには口を出さない。といったような風潮が見られるようになつてきた。

現在のワングルが、どういう状況にあるのか、私は知らない。しかし、ワングルという団体が今後も存続しようとするとならば、必ず相互の信頼感を成立せしむるよう活動していかねばならないだろうし、また、一方では合理的な安全対策をも確立させていかなければならぬだろう。現役諸君の奮起を期待する。

最後になりましたが、亡くなられた由村さんの御冥福をお祈りすると共に、御両親に深く弔意を表します。

### 女性と山登り

#### 四〇年法卒 四方宗和

今年の冬、私は九人のメンバーで笠ヶ岳に入つた。正月にしては異常と思われる降雨とそれによる雪崩で山行そのものはさんざんであった。出発を前にして、女性メンバー三人の内、一人がどうしても両親の承諾が得られず、リーダーであった私が彼女宅を訪問し、種々話あつた。社会人山岳会であり、彼女も社会人であれば、親を

説得出来ないのであれば、参加すべきでないという考えが多数を占めたが、社会人として中味は親がかりに変わりはないので尋ねたわけである。

ここで話の中心になった点は二つあった。一つは、登山は危険であるという事。特に岩登りと冬山はやらないという約束で娘には入会を許したという事。二つめは、登山以外に女らしい女性にふさわしい趣味はいくらでもあるではないか。又、趣味をスポーツに限定しても他に沢山あるではないかという意見であった。二つとも親であれば誰しも感じ又考えるごく当然のことである。

登山の危険性については私も異論はなかった。しかし危険を回避する方法については、いろいろ考えられるし、又、特に冬山に限定して考えて見ると（氷壁登攀を除く）、その危険を回避するのは、おおむねリーダーの技量にゆだねられると考える。積雪期の遭難で多いのは稜線からの滑落と雪崩によるもの、又は気象の読み違えが急変による凍死などいずれもリーダーの行動に移る前、もしくは行動に入ってからの、たとえばアンザイレンをさせる等の判断によるところが多い。そしてそれによつて安全度は増す。丁度、由村さんの事故の事が頭にあつたので一〇〇%の安全は保障出来なかつたが、無雪期と積雪期

の山の危険度が変わること。そして無雪期における事故は個人の技術に帰する所が大きいが、積雪期のそれは小さい事を話し、ほぼ了解してもらえた様に思う。

二つ目の問題は、やっかいであった。趣味とはなんであるか。女らしいとは何であるか。これは国とか世代とか性とかによつて、かなり考え方には差がある。まして親が娘に対する考え方となるとさらにかたよつたものになる。

共産圏に行けば男女同じ質の労働力を提供しているし、一方回教の国々では、外で働くのは、おおむね男性であつて小さな駄菓子屋、花屋（あまり花屋はみかけなかつたが）にいたるまで、いかついオヤジさんが毎日をたくましくこなして座っている。おのずと女らしいの規準も趣味の範囲も変わるであろう。

冬山に行きたいという娘さんと、山以外の事を望む両親と話しは平行線のまま終つたが、数日後、お父さんは丁重なる手紙がとき、結局彼女は冬山に参加する事が出来た。

由村さんの事故を考える時、私は彼女がどの様な経緯で、その山行に参加したか知るよしもないが、彼女が新人であった事、無雪期での転落事故であった事等を考えると、ワンダーであります。基础技術をトレーニング

ングする機会が少なく、さらに他のメンバーもその山域に対する認識に誤りがなかつたかどうか考えざるを得ない。

しかし長年、山を歩いていて、種々な事故のケースを見たが、遭難と無事下山は紙一重の感が今なお強い。四年間という短期間で、山を識り、人を識り、その安全度を高めるという事はむずかしいとは思うが、彼女の死を無駄にせぬためにも、それにあたるのが現役諸君の義務ではないだろうか。

私も将来機会があれば、彼女がその若さが故に、そうおおげさに死というものを考えずに、ごく自然なかたちで土に還つて行ったと思われる荒沢岳の稜線を一度歩いてみたいと考えている。

## 君の静寂

五一年卒業 福田 智恵子

十月の銀山湖は  
朝の光に まばゆく照り返し  
連山を写さず

## 「山は下界の続きではない」

三八年卒業 山田 正

由村陽子さんの死を心よりお悔み申し上げます。

私の入学した昭和三四年暮、立命の山岳部が剣岳で遭難し六名が亡くなつた。

私は最初山岳部に申込んだ。入部ガイダンスの時、まだ春だというのに真黒に日焼けした主将らしい人が「我

山岳部に開部以来無事故で、関西では唯一の大学である」と誇らしげに説明していたのを昨日のように思い出す。

当会に入り学連の役員を長くやった。全日連や、関西の連盟委員会に出ると必ず事故の話が議題にのぼった。その責任のとり方もまちまちだった。山岳部の亜流をいくような大学がほとんどの中で立命と京大、京都府大だけはユニークで絶えず少數意見をとなえ、連盟の中では厄介者だった。

その争点をせんじつめれば山をスポーツの場と見るか、人間性涵養の場と見るかの違いであった。その当時、お隣りの同志社で春の新人合宿に比良山へ行き、石をつめたりユックをかつがせて鍛え、根性のたりぬ新人が一人死んだ。東京農大のしごき事件もその頃だったと思う。

しかし、しごきなくとも事故は起る。そういう意味で保険に入れてることは賢明である。ただ私は保険会社に勤めていて変なことを言うようだが、事故を保険だけで解決しようとする姿勢には反対なのだ。例えば飛弾川バス転落事故を契機にほとんどの都道府県が災害時の事故保障保険に加入している。落石など危険な個所が全国に数千個所もあるというのに補修に費やす費用より保障代に回した方が安あがりとばかり、危険な個所には、

## 上越PW事故をふり返って

C L 波 戸 深

事故発生以来我々は、リーダー会を中心として事後処理並びに原因究明を行なつてまいりました。全く初めてのことでありましただけに、事後処理に専念しましては、御遺族の方々に対しましては、意を尽くさぬところが多く全く恥ずかしい次第であります。事故原因究明もなかなか早急に結論が出せず誠に申訳けない次第です。

今回の事故は、事故報告書あげていますように、我々が会の多くの欠点の集積で起こったと思いまます。そこには、偶然的因素もありましたが、今年のリーダー層、およびクラブ全体に自然活動を行なう上での安全性確保ということを軽視して来た点に、大きな誤りがあったと思われます。今年度は、年度初めより、病気多発によるPWの中止、ならびに夏合宿予備合宿での病人続出による途中下山ペティイーが多かったことなど、夏合宿も心配されたのですが、夏合宿は無事終わり、後期活動を始めた矢先に今回の事故を起こしたわけです。我々

「落石注意」の看板だけで責任のがれする傾向にあることはゆゆしきことである。

その当時リーダーだった吉原君は神社の息子で（現在難波神社で修業中）、私は坊主のセガレで（フコク生命勤務）サブをやり、妙なとりあわせながらうまくやっていた。それは山に対する気持が同じだったからだ。

日本でも外国でも山を靈場とか聖場とする考えは依然として残っている。いつかイギリスの登山隊がヒマラヤの未登峰をきわめた時、地元民の信仰を考えて頂上より五〇メートル下で折返したという本を読んだことがある。

人間の煩惱からして「前進することよりも後退することの方に勇気を要する」ことも事実である。我会の最高目標は頂上をきわめることではなく、いかにしてきわめようとしたかという過程を重要視してきた。

勿論、天気図も書けるようになつていなくてはならない。耐寒や耐暑に対して肉体的にも精神的にも鍛えておることはいやしくも大自然に挑戦しようとする者にとっては最低の義務である。自然に対する畏敬の念が深ければ深いほど、自分を強く鍛えることに意欲が起こるはずだ。そんな中からは単純な事故が発生することはない。

山は下界の続きではないことを忘れるな。

は、夏合宿が終わつた時点では、もつと真剣に前期の反省を行ない、自然活動を行なうまでの安全性を論議する真摯さがあつたなら、今回の事故は、未然に防止できたのではないか、悔やまれてなりません。また、死亡した由村陽子君が新人女子であつたということには、事故パーティのみならず、クラブ内のリーダー層を中心とする旧人の責任は重いと思います。ここにも今年のリーダー層の新人への配慮不足という欠点が顕著に現われていると思います。

我々は、由村陽子君の御冥福を祈ると共に御遺族の方々に深く哀悼の意を表わしたいと思います。そして、由村陽子君の死を会員各々が自分自身で把え、また新たな気持ちで自然活動を行なつて行きたいと思います。それが亡くなつた由村君に対する我々の努めであり我々が由村君の死に報いることであると思います。

最後に多忙な中、捜索、遺体収容活動に御協力を頂きました地元小出警察署、消防団の方々、総務課長さんをはじめとする村役場の方々、銀山平の伝ノ助小屋、三溪莊、荒沢ヒュッテ、杉木小屋の方々、そしてそこに居られた五人の登山者の方々、また親身な御指導を頂きました学生課長さんをはじめとする学生課の方々に深くお礼

を申し上げたいと思います。  
誠にありがとうございました。

事故に関して以下のOBの方々からカンパ金をいただきました

石渡 橋 須 嬉 熊 鈴 松 宇 岩 坂 東 中  
沢 迎 口 永 谷 木 本 野 切 本 島  
千 弘 和 澄 哲 吉 辰 茂 国 純 陽  
秋 一 久 二 也 英 剛 三 樹 徹 実 一  
富 水 山 田 松 田 新 山 三 別 冠 平 村  
田 野 口 中 岡 辺 井 田 村 府 木 野 田  
雅 有 貞 一 賢 日 末 明 曜 伸 義  
也 三 悟 明 之 郎 二 吉 広 則 子 夫 嗣  
安 高 松 西 村 檀 大 佐 福 本 斎 松 大  
立 木 田 上 上 西 藤 田 庄 藤 本 林  
洋 政 隆 俊 幸 智 寛 淳 雅 英  
夫 佳 晋 史 稔 雄 薫 夫 子 之一 男 史  
  
松瀬 西津 田西 陶川 松増 矢長 久今 西川 萩古 堤大木  
井端 堀熊 鶴木 山保 久田野 嶋田 井尾 田原 沢拔原  
和武 唯俊 光正 義昌 治良 誠憲 正輝 敏靖 忠純  
雄男 茂男 夫夫 勝明 司雄 吉郎 実明 次晴 一昭 和行郎  
  
河岩 遠橋 佐宮 溝瀬 塩仁 黒新 中武 阪猪 桑笠 藤山 竹  
合本 藤本 藤村 渕野 原賀 野村 谷田 上飼 原井 田川 岡  
文友 昭雄 俊仁 和真 俊健 紀孝 安雅 建武  
洋隆 誉治 久弘 彬之 己二 行一 彦治 守均 孝昭 興実利  
村岸 倉村 坂四 林香 香沓 笠小 松服 内田 井寺 清小 宮藤  
田橋 上口 方川 名川 林尾 部藤 代上 田川 寺脇 内  
博昭 昌博 宗浩 庄孝 みどり 一良 正字 孝和 長朝 実汎  
毅二 一弘 之和 二司 宣り 郎夫 幸徹 美一 滋次 代也人

なおこの他にも匿名でカンパしてくださった方がございました。厚くお礼申しあげます。

河原 祥晃 新田 啓二 久保田 敬称略 論

## 事故会計報告

### I 事故関係

支 出	990,200	収 入	990,200
事故処理費用	672,700	保険金	500,000
救援関係費用	296,000	会員カンパ	167,700
葬際関係費用	53,700	大阪府大ワンゲルカンパ	5,000
旅費・宿泊費その他	323,000		
葬儀費用 (花、しきび代、香典) (交通、通信費など)	317,500	52年度特別会計	317,500

### II 追悼関係

支 出	1,409,300	収 入	1,409,300
追悼碑費用	619,300	会員カンパ	632,300
追悼碑建立費用	320,000	O B カンパ	777,000
現地調査費用	137,300		
追悼式費用	160,000		
その他の	2,000		
追悼論集費用	790,000		
論集印刷費用	600,000		
郵送費用	150,000		
その他の	40,000		
残 高	326,000		

尚、O B のカンパは 1,103,000 円集まりましたが、上記のように一部追悼関係に使わせていただきました。残金 326,000 円は20周年論集発行費用の不足分 206,000 円にて、その残り 120,000 円を事故対策資金として積み立てます。

(53年度の事故対策資金は、事故前の積み立て金とあわせて 340,000 円となります。)

又、御遺族の方からいただいた30万円は、今後の追悼碑の維持費に充てさせていただきます。

### 追悼碑建立にあたつて

元の関係者の方々に、この記を借りて感謝の意を表させていただきます。

追悼碑委員会

昭和五十二年十月十六日の事故発生以後、我会の由村君を偲ぶ碑の建立をになって、追悼碑委員会が設立されました。その後、現地への下見を繰り返し建立の場所を検討した結果、銀山平の中荒沢の奥（最終的に由村君が運び出された付近）に決定しました。しかし現状では、その場所は国立公園の為に障害が多く、建立もむずかしい状態でしたが、地元の方々の暖かい御配慮と御援助を受け、建立を許可していただきました。

さて、その碑の姿は、由村君に対する会員一人一人の哀悼の意を込め、ケルン形式をとり、上部の石碑には会員の中から選び出した哀悼の語を載せてあります。そして銀山平を訪れる人達に役立ち、愛される碑として我々の願いを込めて造ったものです。

我々に残された由村君はこの場所であり、そしてこの碑であります。立命館大学ワンダーフォーゲル会が存続する限り、O B を始め会員一同由村君を思い、この碑を大事に末長く見守っていきたいと思いません。

最後に、この碑の建立にあたって御協力いただいた地



## 編集後記

ようお願いします。

あの悲しい出来事がおきてから早いものでもう一年たとうとしています。時の流れは無情なもので、今さら僕らがどうもがいてみても、由村君のあの明るい笑い声は僕らの耳には届かぬものです。

由村陽子君、安らかに眠つてください。

彼女に対する僕らのせめてもの償いとして、彼女の追悼文集を、会誌として発行しようということになり、昨年十一月から追悼誌委員会を発足させ、今までやつきました。どんなことがあっても、彼女の一周忌までには、完成させようという意志のもとに、微力ながら力を尽くしてきました。

御遺族の方、御友人の方々、学校関係者の方々、OBの方々の御協力によりまして、ここに会誌である漂雲として、追悼文集を作ることができました。この会誌を発行するにあたり、御協力くださった方々に心より御礼申し上げます。

なお、内容につきましては、種々不十分な点があるかと思いますが、御高覧の上、御指導、御叱責賜ります

立命館大ワンダーフォーゲル会が今後決してこのような悲しい出来事を起こさないように、絶えずこの出来事を戒しめとして、この文集を、後代末長く伝えていきたいと思います。

最後に、OBの方々からこの本を作るにあたり、多大なカンパをいただき、感謝の意を表するとともに、再度本誌発行の為に、お忙しい中を御尽力下さいました方々に、心よりお礼を申し上げます。

### 追悼誌委員会

昭和五十三年十月十六日発行  
非売品  
発行者 立命館大学  
ワンダーフォーゲル会  
編集者 由村陽子君追悼号  
漂雲編集委員会  
印刷所 はいづか印刷